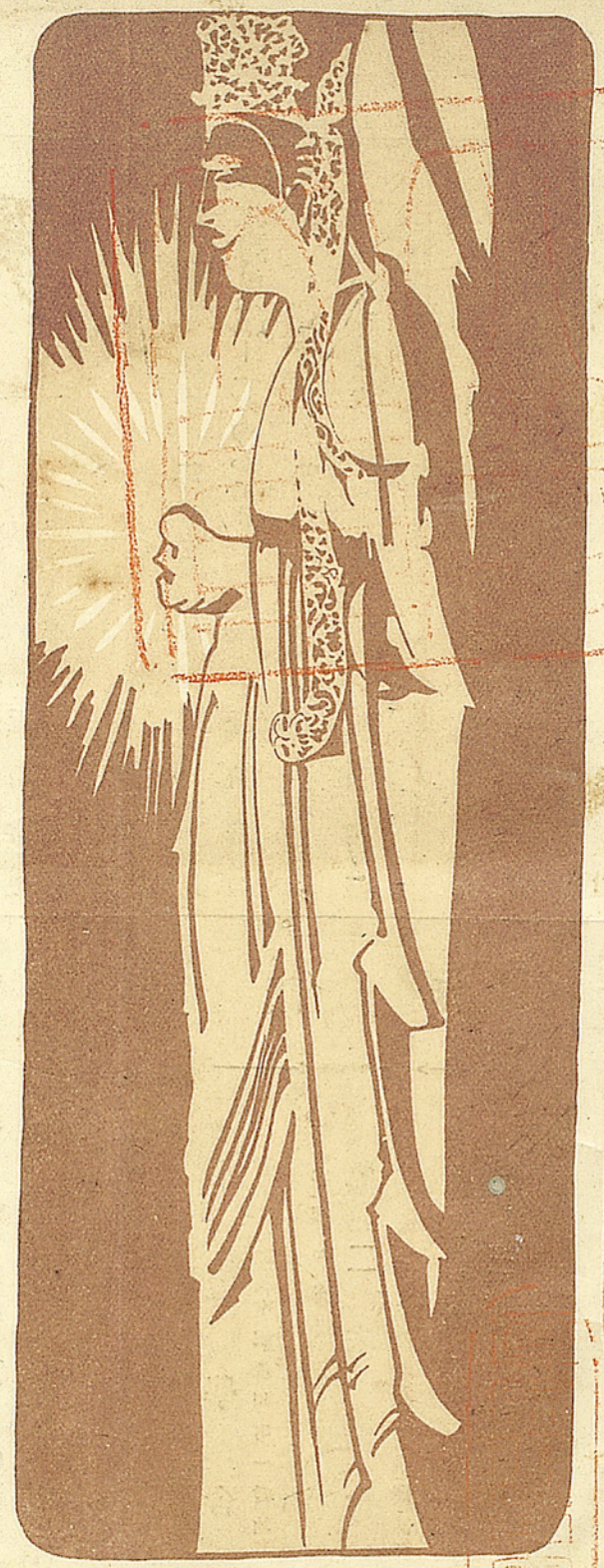
求道

第四卷

第壹號



明治四十年一月卅一日發行（每月一回發行）

明治三十一年十二月二十六日　第三種郵便物認可

求道第四卷第壹號目次

◎他力の眞髓　求道　感謝
◎年頭感謝◎順境逆境◎佛力現前◎法則之解
◎大信海◎驕慢と自暴　講話
◎慚愧心　告白　近角常觀
◎少女の信狀　致誨　掬月千壽
◎致誨自誡―一信仰か道德か　講義　近角常觀
◎歎異鈔―第二章　歎咏　近角常觀
◎人間の活路《長詩》　左千夫
◎笑ます兒《短歌》　八風
◎悲泣雨涙《短歌》　志都兒
◎影向《長歌》　紹介　甲之
◎懺悔錄◎理想之人◎宗教詩集頌榮　時報
◎昨年の求道會◎本年の求道會◎求道學會の現狀◎第一高等學校德風會◎求道會講話題　感想
◎母を奉じて磯長の廟に詣づるの記　近角常觀

講話

毎日曜午前九時
求道學舍
（本郷森川町一番地）

毎土曜午後二時
第二求道會
（九段坂佛教倶樂部）

毎月二日午後六時
第三求道會
《日本橋蠣殼町說教所》

求道
第四卷
第壹號

他力の眞髓

一世は漸く他力の偉大なるを知り初めぬ、されど世に知らるるだけ思ひ誤る人もあり、誤れるを見て其眞價を知らざる人もあり、我等は唯其高く大なるを歎美して佛智不思議の深廣なるを仰がむかな。

他力と言ふは如來の本願力也

これ親鸞聖人が他力の眞髓を叩きたまひし言也、嗚呼我等罪深く煩惱熾んなるもの徒に人世の風波に漂はされ生死の苦海に沈淪して、いつ彼岸の見つべしとも覺にず、かくの如く苦み惱める我等を見そなはして、慈悲の手を下し、攝取の光明を放ちて人生にあらはれたまひし御姿こそ、盡十方無碍光如來の正覺也。

無碍光佛の來現したまひし目的は何ぞや、世に佛陀在ますは、そも何の爲なりや、人は言ふ人世の目的はいかにと。我等は顚倒の人生に目的ありとも覺へず、顚倒の人生に來現したまひし佛の目的こそ我等聞かで空しく過すべき、其目的は十方に響き渡れり、即ち彌陀佛の本願こそ、これ佛の正覺を得たまひし主眼也、此本願は空想にあらず、虛構にあらず、空望にあらず、はた我等の想像にもあらず。是れ靈界の事實也、如來の根源也、人生を覆ふの力也、即ちこれ絕對の力也、他力といふはこの偉大なる御力を信ずること也。聖人の曰く衆生佛願の生起本末を聞きて疑心あることなし、之を聞といふと、かくの如き大慈悲の淵源を聞かでいかでか他力の眞髓を味ひ得べき。

彌陀の五却思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそこばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよとの御述懷如何にも尊き極みならずや、我等この本願を力とせずして何をか賴まむ、何をか便りとせむ。本願は御親の心なり、阿彌陀佛は親の御名也、世に親あるを知らざる子供こそ不便なれ、親あるを知るも親の名を知らざる子供は猶不便なり、すでに親の名を稱へながら親の心を知らざる子供に至りてはいかに〳〵不便の極みならずや、本願は親の心也、佛の約束也、如來の誓也。

經に曰く其名號を聞きて信心歡喜すと、親の御名を聞き、親の御心を聞く、いかで我等の胸の躍らざるべき、我等の心の歡ばざるべき。天に躍り地に躍りて大歡喜の情身に溢れ世に滿ち、是れ信心歡喜のありさまにあらずや。佛の本願力を觀ずれば、遇ふて空しく過ぐる者なし、能く速かに功德の大寶海を滿足せしむと、是れ本願力を信じたる眞想也、大滿足也、かくの如きの歡喜あり、かくの如きの滿足あり、歡喜溢れて感謝となり、滿足漲りて活動となる、他力といふは感謝の人生を齎し、活動の大動力を持來す。是絕對他力の信仰也。

動もすれば世の人他力を思ひ誤りぬ、そは他力とは我等が心の中に佛を思ひ定めて、それに何事もみなまかすることなりと。我心に思ひさだめたる佛にまかするときは頗る心元なき心地すなり、放縱に流るゝ心持するなり、全く佛にまかし畢るときは頗る危きやうに思はるゝ也。此に於てや以爲らく絕對の他力は頗る危し、我れ佛を力とせん、されど佛を力として我が足を運ばんかなと、佛は杖也、されど歩むは我自力也と、遂に半他力に陷りぬ、恰も片足は船に乘りて、片足を岸に置く人の如く、仆れずして止むべき。かくの如きは眞の他力にはあらず、眞の佛力によりたるにあらず、我心の中に作りたる佛によりたる也、假定の佛陀也、假の門戸也。

我等が思ひ定むるとによりて佛あるにあらず。我等が思ふも思はざるも佛は永遠の昔より我等を憐みたまふ也、此大悲矜哀の御親心こそ即ち如來の本願也、一たび此大悲の念力を聞かば如何なる罪惡の我等も心を安ぜずして止むべき、實に是れ難度海を度するの大船、生死大海の船筏也、岸にありながら船に乘る心地をなすものは身動かず、片足船に乘るも片足を岸に置くものは身裂かれん、唯全く願船に乘ずる人のみ易行水道の樂しきを悟らむ、聖人曰く、大悲の願船に乘じて光明の廣海に泛びぬれば至德の風靜に衆禍の波轉ずと、是他力の至樂也。

又世の人以爲らく、人生の出來事は皆佛陀の心より出づ、この事を知ること即ち信仰なりと、いかにも親の心を知りたるものは何事も親の心より出で來ることは明らかならむ、されど親の心を知らで何ぞ萬事皆な親の心より出づるを知るを得ん、先づ佛の心を知れ親の心を知れ、佛心は大慈悲也、親の心は本願力也、佛の慈悲を信じ、佛の本願を仰がずんは何ぞ人生の意義を生ぜん、何ぞ人生の出來事の佛の心より出づるを知らむ、仰ぐべきは本願なるかな、尊むべきは大慈悲なるかな是れ他力の眞髓也絕對の信樂也。

盡十方無碍の光明は十方世界を照して餘す所なし、誰か之を仰がざらむ、誰か之を信ぜざらむ、時に古今の別なく、處に東西の隔あらむ、他力は即ち絕對の力也、救濟は即ち如來の本願也。論に曰く

本願力と言ふは大菩薩法身の中に於て常に三昧に在て而も種々の身、種々の神通、種々の說法を現じたまふことを示す、皆本願力より起るを以てなり

絕對救濟の本願は種々に我等を導きて遂に我等をして其光を仰がしめずんば止まず。此に於てや人生何れの所か大慈悲の行き渡らざることのあるべき、如何なる罪業か此光明に洩るゝことのあべるき、實に誓願不思議なる哉實に佛智不思議なる哉。

淨土傳に云く、阿彌陀佛と觀音勢至の二菩薩と大願の船に乘じて生死の海に泛び、此の娑婆世界に就て衆生を呼引して大願の船に上せ、送て西方に至らしむ、昔て往く者の如き生を得すと云ふを無し、此を觀れば則是れ與菩薩は衆生の苦海に沈淪して出る事を得るに由無き事を憫念し給ふ、故に自ら誓威力を以て人を招誘して淨土に生れしむる事、舟人の行人を招誘して舟に登せ、送て彼岸に至らしむるが如し、人唯恐くば信ぜざる耳、若し信心にして肯て往かば罪惡有りと雖も亦生を得ずと云ふことなし、蓋し佛は凡人を以て比す可らず、凡人は勢利の爲にあらざれば人と交はらず、已を益する事あるにあらざれば人と交はらず、此れ凡人たる所以なり、賢人君子すら已に此の如からず、況や佛に於てをや、蓋し慈悲あらざれば佛とするに足らず、衆生を濟度するにあらざれば佛とするに足らず、大威力有らずんば佛とするに足らず、其慈悲の爲の故に衆生の苦海に沈むを見て濟度せんと欲す、其大威力有るが故に能く濟度の心を遂げ濟度の功を成す、此れ佛たる所以なり。

《龍舒淨土文》

感謝

年頭感謝

『慈光はるかにかふらしめ、ひかりのいたるところには、法喜をうとぞのべたまふ、大安慰を歸命せよ、』世界を覆ひ、十方を盡して照したまふ無碍の光明は四海の同胞を悲憫して清淨、歡喜、智慧の功德を與へたまふ、如何なる苦境にあるの人も此光に遇へば忽ち其苦を滅し、如何なる樂境にあるの人も此光に照らされば其樂に着せず、無量壽の長へなる希望を仰ぎて無碍光の照耀を嘆ず、十二光讃嘆の和讃は實に年頭に於て最もふさはしき感謝なり、而して我等に於てこそ年の始といひ終といふ、佛陀は無始より盡未來際に至るまで少しも渝りたまふなし、我等に於てこそ生といひ死といふ、佛陀は我等の至る所に常に待ち受けたまふ、あゝたのもしき慈光なるかな。

順境逆境

逆境にあるときは我身の苦の爲めに覆はれ去らむとす、されど佛陀は其逆境にありて力を與へ、慰めを與へ、希望を與へたまふ、順境にあるときは我身の樂の爲めに忘り去らむとす、されど佛陀は其順境にありて警告を與へ、肅みを與へ、抑損を與へたまふ、世に佛陀なかりせば苦めるものは自ら壞らむ、樂めるものは自ら驕らむ、世には順逆あり、人に浮沈あり、而して千古萬古常住にして變易なく、大悲常に照して倦むなきは攝取の心光なる哉。

佛力現前

我常に懈怠に陷るときに常に下したまふ警告は佛力現前して了々分明一毫疑の餘地なからしむるにあり、そは多年苦める人の一冊の書、一席の講話に忽然として佛の大慈悲に感泣渇仰して即時に歡喜愛樂の人となる時に在り、かくの如き大なる力を眼前に拜見したてまつるとき、我は唯仰嘆したてまつるのみにして我見強き我、一厘の私を挾むことあたはず、唯渇仰の念佛は口に溢れ、感謝の涙は知らず識らず兩眼に滿ち、衣の中に得信の人を拜するを禁ずる能はざる也。

大信海

法則之解

親鸞聖人一念多念證文の中に則是具足无上功德といへる文を釋して曰く、『則といふはすなはちといふ、のりとまうすことばなり、如來の本願を信して一念するに、かならずもとめざるに無上の功德をえしめ、しらざるに廣大の利益をうるなり、自然にさま〳〵のさとりをすなはちひらく法則なり、法則といふは、はじめて行者のはからひにあらず、もとより不可思議の利益にあづかることの自然のありさまとまうすことをしらしむるを法則とはいふなり、一念信心のうるひとのありさまの自然なることをあらはすを法則とはまうすなり』則を解する法則を以てす、既に驚くべし、法則を解して行者のはからひにあらず、如來のはからひの加はりて一念信心の人は求めずして無上の功德を得、知らざるに廣大の利益を得る自然の法則と宣ふ、行者自力の法則を脱して一念信心の人となるときに他力自然の法則は自づから生じたまふ。是即ち無義の義なり、無礙則の法則也。

聖人信卷に曰く、凡そ大信海を按ずれば貴賤緇素を簡ばず、男女老少を謂はず、造罪の多少を問はず、修行の久近を論ぜず、行に非ず、善に非ず、頓に非ず、漸に非ず、定に非ず、散に非ず、正觀に非ず、邪觀に非ず、有念に非ず、無念に非ず、尋常に非ず、臨終に非ず、多念に非ず、一念にあらず、唯だ是れ不可思議不可稱不可說の信樂也、喩へば阿伽陀藥の能く一切の毒を滅するが如し、如來の誓願の藥は能く智愚の毒を滅する也と、これ實に絶對信仰の至極を示したまふ也、如來の御惠みの下には何ぞ位置の上下を問はん、僧俗の區別あらむ、男子たると女子たると老人たると年少たるとの別を認めん、一切平等惠みの下に感泣するの一信心のみ、罪多ければとて惠みに洩るゝことなく、罪少ければとて惠に甘ゆることなかれ、修行久しければとて之を奢ることなかれ、修行淺ければとて何ぞ自ら退くをなさん、念佛は如來の惠みを仰ぐことなり、行と思ふべからず、善と思ふべからず、信心は大慈に遇ひて佛智滿入する也、頓悟見性の敎にもあらず、漸次修行の敎にもあらず、息慮凝心にあらず、廢惡修善にあらず、觀法の正邪を言ふにあらず、意念の有無を力とするにあらず、臨終正念の敎にあらず、さりとて、さりとて尋常日用

の教にもあらず、必しも多念修行の教にもあらず、はたまた一念事終れりと執すべからず、要するに唯不可稱不可說不可思議の大慈悲を歡喜愛樂し奉る淸淨の信心也、愚者にも毒あれば智者にも毒あり、凡夫も毒あれば賢者にも毒あり、而して如來の大慈悲誓願の藥は一切の毒を滅して同一鹹味大信海の中に哀愍攝受したまふ、嗚呼吾人尊むべきは唯此不可思議の信樂海なる哉。

驕慢と自暴

我佛陀の如く行ひ得ると思ふものは驕慢なり、我佛陀の境に住し得ると思ふものは驕慢なり、我の外に佛陀なしと思へるものは驕慢なり、我佛陀なりと思へるものは驕慢懈怠の至極なり、されど我佛陀に近くべからずと思ふものは自暴なり、我佛陀に安んじ得べからずと思ふものは自暴なり、我佛汝の惠を蒙らずと思ふものは自暴なり、我佛陀の子なりと思はざるものは自暴自棄の至極なり、而して驕慢と自暴と共に自力の極にして如來に從順ならざるは一也、嗚呼一たび如來に歸命し、勅命に從ひ奉らむか、己を空しくして罪惡を慚愧し慈悲を感謝して心自から充實する也、而して是如來回向の至誠心也。

As a sweet smelling Kokanada lily
Blooming all fragrant in the early dawur,
Behold the Sage, bright with exceeding glory
E'en as the burning sun in the vault of heaven!

講話

慚愧心

（求道學舍日曜講話）

近角常觀

今日の題は慚愧心と出して置きました。慚愧心とは自己の罪深きを中心より慚愧する心で、世に慚愧ほど有り難い心はありませぬ。自分の罪深きをば自分より眺めて之を天に慚ち地に愧ち人に耻ぢ自分に耻ぢ、自から語り人に話して自分の罪ふかきを耻づる心が即ち慚愧であります。つまり自己の罪惡をば初めて自分に知りて身の措き處なく耻づる心であります。

處が親鸞聖人は此の慚愧の上に更に何と言はれてあるかといふに聖人は自分は無慚無愧の者である、慚愧する事さへ知らぬ淺間しき親鸞であると仰せられてあるのです。既に慚愧が自分の罪深きに身の措き處なく悲む心である、然るに其慚愧さへ出來ぬ無慚無愧の親鸞であると聖人は悲歎せられてあるのです。茲て慚愧と無慚無愧との味が實に有り難い。我々は自分の罪惡深重に氣が着くならば一瞬と雖も慚愧せずには居られぬ筈である。然るに實際は何うか、自分の罪惡の深き事をも知らず、如來の御恩の高き事をも知らず、無慚無愧の有樣にて却て之を富然のやうに暮して居るのである。實に淺間しき限であります。故に之を我々より頂けば親鸞聖人は無慚無愧であると慚愧せられたのである、自ら無慚無愧と曰はるゝ程手ひどき慚愧をせられたのである、聖人の御言葉は實に慚愧の極點を示されたものであります。猶ほ多少の御文を拜讀して行けば更に能く解る事と思ひます。

無慚無愧のこの身にて　　まことの心は無けれども
彌陀の廻向の法なれば　　功德は十方にみち給ふ

我々は實に無慚無愧、一點のまことも無き者である。自身を言へば何處に一點の取處も無い。本來自分といふ考が根本的に惡いのである。其の惡くて取處の無き者故に之を慚愧せなければならぬ筈である。夫を愧づる事を知ら無い、我々は飽迄惡に惡をかさねて居るのである。實に人間は罪惡の極、無慚無愧であります。古人は懺愧の水を以て煩惱を洗ふのであると申されしに我々は其慚愧の心が起らず日夜に惡に惡を重ねて居るのである。私如きは御承知の通り「懺悔錄」といふ書物迄出しました。惡を慚愧す可きであるに無慚無愧に暮せるのみか、尙ほ「懺悔」といふ名を以て其無慚無愧を飾り立てやうとするのである。實に勿體ない事であります。夫を懺悔で洗はして貰ふのであります。中心より惡で塊つてる我等であります。心は絕對的に惡ではないが、唯幾分惡が有る抔と思ふてる間は自分にとりどころがあると思ふて居る爲であります。

私は今年初より一寸風邪に犯されて暫らく寢て居ました。風は直に快くなりましたが未だ喉が充分になりませぬので引籠つて居ます。夫に就て自分で考へて見まするに、自分の職

分を少しも全ふする事が出來無い。殊に今年は何故か彼方此方と遠く信仰の御緣を結べる諸方面より、年の改まると共に著しく反響の喜びが現れて來るのです。近頃の私の感じてはあちら此地と或は内に或は外に色々に信仰の御緣を結べる諸方面へ佛陀の光が一時に響き渡つて、春に花の咲く如く、一時に佛の光を喜ばせて貰ふやうに思はれるのである。夫程佛陀の御光は力強く現はれて下されてあるに、自身を見れば何うであるか。「風を一寸引いた」「喉が悪い」と早や忽に自分の勝手心を起して懈怠におち入りて居る。實に人間には一寸も頼む可き個所は無い。心が善くなる善くならぬ所の話では無いのです。あゝ今日に至る十年間、私が信仰を喜ばせて貰ふて以來今年で丁度十年になる。其の間信仰を喜んだ爲めに一點でも自分の心が善くなつて居るといふことは有りませぬ、殊に此の兩三年間は遠近諸方面に御緣を結ばせて頂きまして、諸方面の方々も皆非常に喜んで居て下さるのである。夫にも係はらず此の私の心の汚なさに於ては昔も今も一寸の變りも有りませぬ。惡く言へば寧ろお慈悲に慣れて仕舞うて横着心が增した計り、眞に自分の狀態を思ふと無慚無愧、誠の心は毫髮も無き者であります。

猶ほ聖人の痛切なる御慚愧は此の外の和讃に於ても伺ふ事が出來る、一體『愚禿悲歎述懷』拾六首は凡て此意を洩されたるものであります。而して此『述懷和讃』が最も聖人御老後の作であれば、聖人は御老年になれば成る程彌々慚愧の情を強くお感じなされたものらしい。今試に初め二三首を拜讀して見ませう。

淨土眞宗に歸すれども　　眞實の心はありがたし
虛假不實のわが身にて　　淸淨の心もさらになし

身は淨土眞宗に歸入して久敷大悲の御惠に預かつて居ながらも、此の我々の心中は何であらうか、飽迄虛假不實の塊で、淸淨眞實の心などは見度くても見えぬ。實に此の通りである。

外儀のすがたはひとごとに　　賢善精進現ぜしむ
貪瞋邪僞おほきゆへ　　奸詐もゝばし身にみてり。

我も人も表面には、賢善精進の相を裝うて居るが、心の內面は貪瞋邪僞姦詐百端にして目も當てられぬ有樣でないか。表に賢善精進を裝はう丈け彌々僞善に僞善を重ねてるのである。

惡性更にやめがたし　　こゝろは蛇蝎のごとくなり
修善も雜毒なるゆへに　　虛假の行とぞ名けたる

我々が心の有樣は何事はない蛇である蝎である。而も此の蛇蝎の心をば慚愧する事を知ら無いのみか、有ゆる自力雜毒の修善を以て之を覆ひ隱さんと苦しんでるのである。如何にも手嚴しい和讃であります。

偖て斯の如き罪惡の我々であれば、其我々は何によりて安んずる事が出來るか。今慚愧は罪惡を洗ふ水である、然しながら我々は自分の罪惡を慚愧して夫で以て安神する事が出來るか何うか。慚愧は罪惡の皮をめくるならば最後に至る迄て皮計りである。茲に至つては最早や如何とも爲る事が出來ぬ、其如何とも爲可らざる者に向つて初めて佛陀絕對の救濟があるのです。「彌陀の廻向の法なれば　功德は十方にみち給ふ」て、實に絕對の廻向である、絕對他力の味は茲に有るのである。我々が斯く迄罪深く淺間しき者なればこそ、茲に彌陀廻向のみ名が用意されて有るのです。我々は自分には一點の廻向心も無い、唯彌陀廻向の御力で、佛陀絕對の御惠み一つで救濟にあづかる事が出來るのである。佛陀は此罪惡深重の我々に向つて絕對の慈悲絕對の哀みを廻旋して下さる、是が廻向て有る。斯くして我々に與へて下さるのが南無阿彌陀佛であります。南無阿彌陀佛、口にすればたつた一言では有るが此の中には一切の功德一切の惠みが皆籠てある、阿彌陀佛は一切諸佛の本佛である、南無阿彌陀佛とは卽ち其阿彌陀佛に歸命するのである、すがるのである、あこがるゝのである、任かするのであります。其阿彌陀佛の絕對の御惠みに對し南無と一念歸命する其處に佛あり我を攝取し給ふのである。父と呼べば父現はれ母と呼べば母來る、南無阿彌陀佛と呼び奉れば、佛之をきゝて我を攝取して下さるので有ります。「彌陀の廻向のみ名なれば、功德は十方にみち給ふ」と實に難有い、初めにも言ふ如く自分を顧みれば自分には一寸の取り處も無いのである。「自分の本心は惡では無いが罪が有るから可け無い」などゝ言へば、何處かに善い處が有る如く聞こゆるも、そんなごまかしは言うて居られぬ、我が身は無慚無愧、惡斗りの凝り塊である。其の者なれども彌陀廻向の御名なれば、絕對の功德を頂く事が出來るのて有ります。我々の罪惡も實に絕對大であるが彌陀廻向の御力は夫に優さる大さである。

願力無窮にましませば　　罪惡深重も重もからず
佛願きわまり無き故に罪惡深重の我をも重しとし給はて御救ひ下さるのであります。「我々は如何にも罪惡深重であるが、佛に任かせ奉れば我々は樂になるのて有る」と、そんな氣樂な事が來れば實に結構であるが、我々は何處迄も罪惡の凝塊である、如何に致しても罪を離るゝ事の出來ぬ者であります。去りながら其淺間しき我々なれども此度は彌陀の願船に乘せて頂くのである、彌陀の願船に乘せて頂けばこそ斯く迄苦しき罪ありながら、其苦しみが苦しみとならず、重きが重きとならで助かるのである、無慚無愧の此身にて、誠の心は無けれども、彌陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみち給ふて下さるのであります。

佛智無邊にましませば　　散亂放逸も捨てられず

偖て斯くなつて來て茲が大事である。前々より云ふ如く我が身は實に無慚無愧罪惡深重の骨頂ではあるが、彌陀の廻向の御名なればと、一念、佛の大慈悲に氣が着くに及んで茲に初めて眞實の慚愧心が現はれて來るのであります。今迄は如何に勉めても出て來無かつた慚愧心が、今は大悲の御惠みで自然と溢れて下さるので有ります。自分が苦しんて居る時には誰でも自分を省みる心は起らぬが、樂になれば扨てと深く省みる心が動く。同じく今は佛陀の御惠みで、御名の御力であゝ實に罪惡深重の淺間しき我身て有つたと初めて解らせて頂く事が出來るのであります。「彌陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみち給ふ」絕對の惠みより廻旋し給はる功德は無碍である、或は感謝の喜びとなり、或は慚愧の情に打たしめ給ふ、何も彼も皆佛の御惠みより賜はるのて有る。實に六字

南無阿彌陀佛より光被し給はる功德は盡十方界に遍滿してて下されて測り知る事が出來ませぬ。

又同し和讃に宜はく、

小慈に小悲も無き身にて　有情利益はおもふまじ
如來の願船いまさずば　苦海をいかてか渡る可き

今日の思想界には理想てあるとか、人道てあるとか、慈善博愛等の叫びが段々と盛になつて來て、今や此等の聲の下に人は非常の渴仰を以て集まる時節てあります。無論之は決して惡くは無い、寧ろ大に慶す可き現象て有ります、がさて我々は眞實に之を實行する事が出來るか何うかといふに否、本當の事は一も出來て居無いのてある。夫は何うかと云ふに我々の慈悲、同情なるものは中心よりして眞實に來るのては無い。歎異鈔の第四章には宜はく、

慈悲に聖道淨土のかわりめあり、聖道の慈悲といふはものを哀れみ、悲み、はぐゝむなり、しかれども思ふが如く助け遂る事極はめて有りがたし。

と、我々人間の力を以てしては思ふやうに慈悲を行ふ杯は到底出來ぬので有ります。我々が慈悲を行はふと思ふ時に既に慈悲は無くなつて居る、慈悲慈善を行はんと思ふ心既に「我は善を爲せり」といふ自分の心をば滿足させんが爲めに慈悲慈善を道具に使つて居るのてある。我々は眞に小慈小悲も無き者てあります。早い話が我々は眞實に敵を愛する事が出來るか、仇を咎めぬ事が出來るか何うか、私には何うしても出來無いのてある。或は金錢を以て名譽に代へる事は出事るかも知れぬ、餘力を貸して高慢心を滿足さする事は出來るかも知れぬ。けれども身を捨てゝ人の爲にする、敵をば愛するといふ事は何うあつても爲し能はぬのて有ります。否敵を咎めぬ丈け或は敵に物を與へる丈けならば猶ほ或は出來るかも知れぬ、併しながら敵を許すといふ一事は何事が有つても決して〳〵出來ぬので有ります。若し之が出來ると思ふ人あらば其人は餘程自分を偉いと思うて居られる人てある。親鸞聖人は「小慈小悲も無き身にて、有情利益は思ふまじ」と告白せられました。

私は日曜毎に諸君と御話して居りますが、私一身より申せば決してお話などの出來る私ではありませぬ。無慚無愧小慈小悲も無き身てありながら人を利するなどゝ思も叶はぬ事てあります。去りながら其次に「如來の願船いまさずば、苦海をいかてか渡る可き」斯る淺間しき世、かゝる淺間しき我等の爲に茲に如來の願船が居て下された。如來本願の御船が我々を待ち受けてゝ下されたのてあります。若し此の船ましまさずば我々は苦海をいかてか渡る可き、永久に苦しき人生を脫却する期は無かつたので有る、小慈小悲も無き我々、固より有情利益杯思ひも及ばぬ我々てある。然るに茲に如來本願のみ船が待ち受けて居て下された。歎異鈔の續きに

又淨土の慈悲といふは念佛していそぎ佛になりて大慈大悲心をもて思ふが如く衆生を利益するをいふ可きなり

とある、如來の願船茲にあり、南無阿彌陀佛を唱念して此願船に救はれ彼土に到りて美はしき佛として頂いた時初めて眞實の大慈大悲を行ふ事も出來るのてあります。昔は龍樹菩薩此の味をば難行道易行道とお分けなされて

世間の道に難あり易あり、陸道の歩行は則ち苦しく水道の乘船は則ち樂しきが如し、菩薩の道も亦是の如し、

と示された。我々の耳には充分慣れきつてあるから左程にも感じぬが、中々有り難い御文てある。小慈小悲も無き身を以て悲慈善根を行じ種々と理想を實現して行かうとするは難行道陸路の歩行である。そんな事とても出來ませぬ。小慈小悲も無い身を以て歩ける歩けぬも無い話てある。いつも能く言ふ御文てあるが、聖人の仰は何うて有るか。

一切の群生海無始よりこのかた乃至今日今時に至る迄穢惡汚染にして淸淨の心なし、虛假諂僞にして眞實の心無し

今日今時即今只今が既に罪惡の凝塊てある。然かれば到底陸路を行く事は出來無い我々て有ります。處が慶ばしき哉、茲に如來の願船が居て下された、水道の乘船は樂しき如く、此の願船に乘ずれば自ら計はねども善きに引き連れて下さる。此願船に乘るなり忽ちれ助け下さるのてあります。而して此の願船に乘托すれば茲に廣大の惠みが現はれて下さるのてあります。併しながら其の爲めに我々の罪業が一厘でも善くなるのては無い、我は飽迄も昔の無慚無愧の罪體なのてあります。さりながら其の無愧無愧の憐むべき我なれども佛は之を廣大なる願船の御力を以て救ひ取つて下さるのてある。而して佛陀の御惠みにて自然と慚愧の情をも起さしめて下さるのてあります。

數日前も筆を執りつゝ彼の有名なる耳四郎の實例を味はせて頂きました。話の筋は既に諸君が御存知てもあり、又外にも記して置きますから略して行きますが、此の耳四郎の一例ても味ひ方一つて大なる間違を生ずる事になります。昔より之を何と讀んて居つたかと言ふに、念佛はして居ても、信仰は得て居ても猶ほ性來の惡業は止まぬものと見て居つたのてある、之は頗る淺墓なる見方と申さねばなりませぬ。耳四郎の味ひは其處ては無い、耳四郎の如き大惡人なれ共念佛せる爲めに其惡人が一命を助かるのみか、遂には性來の惡事は斷たれ、夫のみならず其五逆十惡の耳四郎に南无阿彌陀佛の六字がお宿り下され遂には大願海の中へ救ひ取られたといふ處が要點なのてあります。小慈小悲も無き身にて、有情利益はおもふまじ、如來の願船いまさずは如何して五逆十惡の耳四郎が苦海を離るゝ事が出來ませう。夫に就きて私は思ひます、覺如上人は耳四郎の物語に附記して宣はく

今時の道俗誰の輩か之にかはる所あらんや、此身に於いては三毒をたゝへ、外に十惡を行す、造るに强弱ありと雖も、三業皆な之れ造罪なり、犯すに淺深ありと雖一切悉くこれ妄念なり、然れば誰の輩か罪惡生死の名を免れん、何れの類か煩惱成就の體にあらざらん、造るも造らざるも皆な罪体なり、思ふも思はざるも悉く妄念なり云々《拾遺古德得》

と。私は思ふ、我々は耳四郎を强盜と言つて居るが、佛の御目より御覽なさる時は我々も耳四郎も少しの違は無いのてある。之は法律上の罪人、之は宗敎上の罪と、佛の前にはそんな區別は無い、一切凡て罪てある。形の有る無しにかゝはらぬのみならず、思ふも思はざるも悉く之れ妄念なのてある。所謂人生の凡て、道德の有無等に係はらず、凡てが皆な罪體な

のであります。然るに其罪體の我等なれ共今度は彌陀の願船に乘じ南无阿彌陀佛の御惠みによりて心底より安心させて頂くのである。如來の願船いまさずは、苦海をいかでか渡る可き、唯佛陀の御慈悲此の外に何事も無いのであります。

親鸞聖人の御言葉は晩年になればなる程彌々強く出て居る樣に伺はれる。和讃の一番最後には宣はく、

善し惡しの文字も知らぬ人はみな、まことの心なりけるを、善惡の字しりかほは、おほそら事のかたちなり。

是非しらず邪正もわかぬ此の身なり、小慈小悲も無けれども、名利に人師を好むなり。

あゝ實に淺間しき親鸞であると慚愧を以て和讃をれ止めなされてあります。我は名利に人師を好むものである、如來の仰せを名譽の爲めに使用せるものである、如來の惠みを我物顏に盜める者である。されども斯る淺間しき「そくばくの業を持ちける身にてありけるを、助けんと覺し召し立ちける本願のかたじけなさよ、彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人が爲めなりけり」あゝ難有や〳〵と御喜びなされたのが要するに親鸞聖人御信仰の姿で有ります。

初にも一寸一言申しましたが私が信仰を喜ばせて頂いてから今日まで何處か一點でも心が變つたかと曰ふに少しも無い、今も昔の淺間しき有樣で、まことに慚愧にたへませぬ。去りながら又佛陀の御惠みの極はまり無きに至つては是亦實に測り知る事が出來ませぬ。十年の昔私が非常の苦しみが緣となつて信仰に入らせて貰つた事實は私の著書をれ讀み下された方、又は私の話をれきゝ下された方は皆御存知て居て下さる事と思ひます。丁度只今講話を初める間際にお出下された一人の御婦人、其處にお出下さる御婦人は私が高等學校に居ります頃其御内に間を借りて居たお寺の方であります。今日は之を御緣に少し私の其當時の追懷を聞いて頂き度い。諸君が今日學校にお通ひなさる如く私も其御宅より毎朝長年の間高等學校に通うて居りました。其の後は大日本佛敎青年會を企てゝ其方へ轉居致し、色々と宗敎上の問題に骨を折つて居りましたが其中に罪惡觀否猛烈なる煩惱に苦しまされたのです。其間半年程は殆ど自分として意識を失ひました程に激しく苦しみました事であります。殊に其苦悶中松島の講習會より鄕里へ歸る際其御寺に立寄つた時の心持は猶忘るゝ事出來ませぬ、其より今日にて丁度十年、此の苦悶こそ實に私が御慈悲を身に汲ませて頂く因緣て、私としては實に難有き御緣でありました。其後は其の寺を度々訪ねます先日も一寸御訪ねして其お子供衆の亡くなられた由を承はり大に感じた事で有りました。而して其の御緣で御兩親の方々も彌々大悲の御惠みを御喜びなされて居る次第であります。現今世間の狀態は何うてあるか。世間の人が皆内心の不安に氣が着いて信仰の問題が俄に勃興して來た有樣は、一々事實を擧げる迄もなく四方八面殆んど火のついた有樣である。私は今や佛陀の御惠みが天下を蔽うて現はれ下らんとする此光景を目睹して眞に喜ぶ次第であります。人の十年にして變化斯の如し、況や佛陀の事業の偉大なる事や、十年百年千年といはず、佛陀は五劫思惟此の方ひとへに私一人の爲めに永久の昔より色々と御苦勞を爲て居て下さるのである。我々は今や廣大の御慈悲が

四方八面に現はれて下さるを見て目を驚かせて居るのであるが、斯く現はれて下さるは何も十年二十年以來では無い、五劫非戴永劫の間常に斯くの如く私一人の爲めに種々の御導きを垂れて居て下されたのであります。こゝに至りて佛智不思議の極りなきはとても言葉に盡すことは出來ませぬ、かく佛德の大なるを仰ぐほど、如何にも我身の無慚無愧を懺悔さして貰ふ次第であります。

聖德太子片岡に遊びます時道に飢人の臥たるを見玉ひて

しなてるやかた岡山のいゐだうへてこやせるたび人あはれおやなし

うゑ人頭をもたげて御返しを奉る

いかるかやとみのを川のたえばこそ我がおほ君のみ名をわすれめ

光明皇后山階寺にある佛跡にかきつけ給ひける

みそちあまり二つの姿そなへたるむかしのひとのふめるあとぞこれ

南天竺より東大寺供養に波羅門僧生の着き給ひける時　行基

靈山のしやかのみまへにちきりてし眞如くちせずあひ見つるかな

返し　波羅門僧生

かぴらゑはともにちきりしかひありて文殊のみかほあひ見つるかな

大伴卿

世の中はむなしきものと知る時しいよゝますゝかなしかりけり

沙彌滿誓

世の中を何にたとへむ朝びらき漕ぎ行く船のあとなきがごと

憶良

世の中をうしとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば

常磐なすかくしもがもと思へども世のことなればとゞみかねつも

家持

世の中は數なき物か春花の散りのまがひに死ぬべき思へば

告白

少女の信狀

先日京都求道會黑田君の道懃會の席上にて告白せらるゝつもりなりしに時間少かりしため聞くことを得ざりしかば、後に口述のまゝをかきて送られぬ、あどけなく御伽噺のやうなるところに幼き心にも御佛の光りの宿りたまふを仰ぎ、また我等が心を御親の眺めたまはんとき如何に〳〵幼きものならんと思ひて茲に採錄しぬ。

掬月　千壽

靜に考へて見ますと私が心に浮ぶのは奥州に居た事です、其時は佛さまのことについては少しの記憶もありません。其れから六歳の時京都にかへりまして幼稚園に行き小學校に參りました。

凡そてすが尋常科の二三年の頃であつたか、家内中の人が佛樣に毎日なぜ御禮をするのであらふかと思ひ、それは自分の家はれ寺だから御禮をするのか知らんなど疑問を起しましたが、ともかく皆が御禮をしますから自分もお役目の樣に考へて御禮をして居ました樣に思ひます。其頃から母が常に私に佛樣のことを聞して下されましたが、私は何んにも感じませんでした。またお母さんはあんなことを云ふて居られるなどのみ思ふて居ました。其時分から漸々佛樣の所へ參りますと佛樣はえらい方だそうなと云ふ感じが起つて來た樣です。えらい方ならどんな方だろうと思ひましたから、其後はお母さんの云はれることをきゝたくなりました、所が佛樣は死んだら極樂と云ふ結構な所へつれて行つて下さると云ことが耳に入りました。それから御禮をする時には佛樣は極樂につれて行つて下さるとは、あゝいゝ人だなと思ふて居ました。

或年の夏(八九才の頃)の夜の事でありました、何時もの通りにお母さんがお話なされました。其時は何んだか私は熱心にきいて居りました、すると母はおまへは死んだら地獄と云ふてこわいこわい所へ行くのだ、この人間に生れて來たらきつと地獄へ行くのだと云はれた故、私は何んとなく心ぼそくなりまして何んで私はこの樣な人間に生れてきたのかしらむと唯心ぼそくてたまりませんでした。すると母は地獄のお話を初められました、眞實に地獄へ行つたらあんたを鬼が大きな大きなまないたを持つて來て、その上にあんたをのせて大きな大きなよーくきれる刀を持つて青鬼や赤鬼がきて、千々に切つてたべるのだと申されました。その時私は自分が切られた樣な心地がして私は身ぶるいして母に問ひました。若し鬼に喰べられたらそれて死んでしまいますのと云ひますと、いゝえいゝえ何程死んでも亦生れて、鬼が前と同じやうにいたい目にあわして切り殺されるのて有ます、丁度あの繪に書いてある通りてある、幾度でも幾度でもあんたの體が出來て切り殺されるのてある、そうして又他の恐ろしい地獄へつれて行くのよと、母はしきりと地獄の御話をいたしました。所が私は毎日學校へ行く道て地獄の繪を見て居ましたのを心にうかべ、母から云はれる度にあゝあそこて學校へ行きしなに見たが、自分があんな所へ行くのかと思ふて私は何ともか

とも知れぬ思ひがして、あゝゝんならどうしたらよいじやろうか、如何にしたらばよからうかと思ひましたがしかたが有ません。其上母はこの世に生れて來たものはきつと其地獄へ行かねばならんと云はれたし、どうすることも出來んと思ひつめて、何んともかとも言はれず心に何もうかびません、たゝこわくてどうしよう〳〵とばかりて有ました。其れて又私はどうしても其所へ行かねばならむかと力を入れて申ました。どうしても〳〵行くのじや、行かなければならむのじやと申されました。其時の私の心はどうする事も斯うすることも出來ず、もう覺悟をきめて居ました。すると母は「こわいじやらう〳〵、其所をすくうて下さるのがゐらい佛樣よ」と申されました。其時に私は、あゝうれしい、そうやつたのか〳〵あゝそうかと私の心は樂になりました。あゝ何時も〳〵おがんで居たあの如來さんが、この所をすくうて下さるのやな、あゝうれし〳〵と思ひつめて、今まで地獄のこわかつたのも何もかもすつかりわすれて、たゞうれしうて氣が樂になつて、うれしい〳〵と思ふていましたが、何時の間にか寢てしまいました、そして朝まて知りませんでした。朝起きてから如來樣に御禮をする時何んとなくうれしくて、あゝそうじやつたか〳〵此如來樣が救うて下されるのだと思つて、其後は如來樣の御前に行くと何んとなくうれしく思ふて居りました。そうして其地獄の繪を見る度に其れを思ひ浮べて居ました。其れからだんだん大きくなるにつけて佛樣は木や金でこしらへて有るから、何んぼうでも出來るわと思ひましたが、極樂と云ふ所が有るから其極樂かち佛樣の魂が來てはいつて居やはるのやなと感じて居りました。そんなら私がこうして拜むて居るのをようしつて居やはるなと思つて、いろいろと考へて御禮をして居りました。

其れからだん〳〵自分にわるいことがあると、母が其れは佛樣がばちをあてなさつたのじやと申されました、なる程私はあんまり大ちやくをしたからばちがあたつたのじや、と云ふことを氣にして佛樣はわるいことをしたから罰をあてはる、あゝ恐いと思つて如來樣をおこらせたら極樂へつれて行つて下さらんかも知れんと思ふて、其後惡いことがあると如來樣にあやまつて居りました。

其後は地獄の事は少しも氣にかゝらず、たゞ極樂と云ふのはどんな所かと思ふてしきりに母に問ひました所が、極樂と云ふ所はきれいな〳〵御殿が有つて、其所へ如來樣か手を引いてつれて行つて下さつて、美くしい〳〵蓮華のお座ぶとんをしいて、そしてあんたを佛樣が一緒に面白い〳〵ことをして遊ばして下されると申されました。そこて私は其時おつれが振り袖の紋附を持つて居られた、其れがほしくて〳〵なりませんから、其んなら私のすきな物はなんても下さるかと申ましたか、母はそうとも何んても下さるの、あんたがほしいと思ふたら何々がほしいと云はないても、たゞ心に思ふともうはやちやんと前に出て來る、そうして佛樣はそれは〳〵どんなものてもすぐ下さると、私のすきな物を澤山申されました。其時私は御淨土へ行つたら一番初めにあの紋附を貰うと思ひました。其後私の御友達が土てこしらへた面子をもつて居られました。私も持つて居りましたが御友達はたくさん

持つて居られましたから、私ももつと澤山ほしい〳〵と思つて、あゝそうじや此れも極樂へ行つたら貰はんならんと思つて居りました。私は學校へ行く道に表具屋があります、私はいつも其表具屋の如來樣をみながらあるいて居ましたが、ばちをあてなさる事に氣がついてから其前を通る時は必ず御禮を申て居ました。或時我は夢を見ました、佛樣が罰をおあてなさつた夢とあの土で作つた面子を下さつた夢を見ました。其二つの夢はどちらが先きで有つたかは覺ゑませんが、たしか佛樣が怒つて罰をあてなさつた方が先きだつたと思ひます。

私が御友達の內へ遊びに行つたのです。其內は御寺で有ました、其本堂で飛びまわつて遊んで居りましたが、ふと佛樣に御禮をする事に氣が付きました故、私は外の御友達をほつておいて御禮をしやうと思つて御前に行きました。所が佛樣の御座る所がきれいな金や銀で作つてあつたものですから、ああ美くしいなと思つて其れを見やうと思ひました。けれども其中が薄くらくてしつかり見えません、仕方が有ませんから私は其前に金でぬつて有るこうしのやうな物が有ましたから、其所にくらい付ひて佛樣の御莊嚴を見て居ました。其時私は自分は此んな所にくらいついて居るが、佛樣は御怒りになりはせんかと思ひながら、もうをりる〳〵と思つて見て居りました。すると何時の間にか目が暗くなつて來て後もさきも分らなくなつてしまいました、所かくらいついて居た手が自然にはなれて來て、其まゝ本堂の中を飛んで居つたと思つたら其れきりわからなく成つてしまいました。すると御友達はしきりに其れを見てさけんでくれました。そこで私は氣が付いてあたりを見ますと本堂のまん中にうつ伏にたをれて居ました。私はびつくりしてやつぱり罰をあてなさつたのだな、あゝ恐わかつたと私はすぐ佛樣に向つて御わびをしました。其れからあとはしつかり覺えて居ませんでした。

其れから極樂へ行つた夢を申ますと、私が學校から歸りしなに何時もの表具屋の前で一生懸命に御禮をして居ました、すると何んだか中の方から御光がさして來たのです。此れは〳〵と思ふて居ますと、其所らが全體明るくなつてまばゆいやうになつて氣持ちよく成ました。所が自分の居る所は路次のひろい樣な所です。其所にはかの面子がたくさん落ちて居ります。あゝ此所にあの面子がたくさん落ちてあると思つて拾ひますと、なんぼでも有ます。そして私は此んなに思ひました、あゝ極樂と云ふ所は此所かしら、私はまう死んだのか、あゝ死ぬと云ふものは樂なもんじやな、其所が變つて一遍に極樂に成るのじやなと考へてもつて其れを拾ひながら、だん〳〵奥へ入つて行きますと、大きな立派な御殿が有ます。此內に佛樣が御座るのやなと思つて其樣側まで上りましたけれど拾ふた面子が兩方のたもとに一つぱいに成つて居ました故、入れて置く所がなくなつて、何處へ入れやうかと考へて居る所へ、向ふから佛樣が二人御出になりまして、おゝよく來たね、其れを此中へ入れよと云つて大きなばけつを持つて來られました。やれやれと思つて其ばけつの中に入れて、此れを持つて歸つてもよろしいかと申すと、れゝ〳〵よいとも〳〵早く持つて歸つて御見せと申されました。やれうれしと

思つて其んなら一度持つて歸りますと云つて、私は佛樣に其ばけつをかいてもらつて、其廣い路次の樣な所まで送つて下さると早や今先き拜んで居た表具屋の前です。私はよろこんで其ばけつをかいて歸る道すがらまで覺えて居ります。其れを內まで持つて歸つたやら歸らなかつたやら覺えませぬ。ざつと此んな事を覺えて居ります。私は惡者ですから佛樣に早くから常に可愛がつていたゞいたのです、先づ少さい時に覺えて居たのはこの位です。

其後高等小學校に進みましてはたゞ世間の事のみ心にして居りました、佛樣に御禮をするにも別に感じもありません。しかしどうかはして下さるものであらふと思ふて居りました。それですから時々自分につらひ事など出來ると、頼むだりして居りました。

高等二年の終りになると皆さんが女學校へ御行きになるから、私も行きたくてなりませんでした。けれど內は聞いては下されず、私も女學校の試驗がむづかしいと云ふことだから落第しては人に笑はれる故と思つて、行きたい事は行きたいのでしたけれど心をおさへて居りました。其れから三年になると二年の時に女學校の入學試驗に落第した人が、又受驗すると云ふて勉強せられます。私はいよ〳〵行きたくなりまして母へたのんで見ましたら、父の所へ手紙を出しましたが、やはり承知して下さる樣にもありませんから、私は不平でなりませなんだ。最早女學校の試驗もすみ私はやはり小學校の始業式に行き、あくる朝學校へ出かけました。半道まで來りますと私はふと物をわすれて居まして內に走つて歸つたのです。と同時に使がくるのに出會ひました。何事かと聞いてみますと父よりの返事でありました。さほどに本人が行きたくば其意に任せよと云ふことであります。私はうれしくて〳〵なりません、けれども其時は最早何れの女學校も入學試驗がすんで居りまして、唯一つ殘つて居るのは私立の淑女學校て有ました。其れも試驗までの日數は僅に五六日程しか有ません、其所で私は佛樣に一生懸命でたのみました。其から試驗して兎も角も本科二學年に入る事が出來たのです。其時私はあゝ實に佛樣は私の願をよくきいて下さつたと思ひました。私より年も多いよく出來る御友達と一緒でありましたから、私はあの方は必ず及第なさるであらうと思つた方が及第なさらず、落第しやうと思つた私が及第したので、私は不思議でなりませんで、全く佛樣が及第させて下さつたとしか思はれませんでした。何ぜあの御友達の方は出來なんだらうかと不思議でなりませんでした。私は入學が出來たと云ふことを知りて歸ると直に佛樣に、御陰樣で及第いたしましたと云ふものゝ、自分の心の內では一生懸命でたのんだからだと思つて居ました。

其から女學校へ入學しましてからは、ただぼんやりとした考てあつたのです。

其れから去年(三學年の時)求道會の方々が見えますやうになつて、私は皆樣の御話をちら〳〵ときゝますと、何事も自分の計ひでは無い、全く佛天の御計ひだとか、此が此まゝ救はれて居るのだとか、私にしては何となく胸にひゞきます。家ではかやうな事をきゝますし、此時私は始終人の事を羨や

んで居りました。其れは私が道て高等女學校の人達を見ますと何ぜ私は高等女學校の試驗を受けなんだのかしらん、又ハイカラの御友達を見ると其れに付けて色々の事を思ひ、學校に行きても人の立派な衣服や色々の物を持つて居られるのが羨やましくてなりません、又試驗になりますと何ぜ私は皆さんのやうに早く記憶が出來ないにぶいかと、何につけても不平や不足て〳〵なりません。ふと考へましたことには、同じ人間に生れてなぜ此のやうに不幸だろう、いえ〳〵まだ〳〵私より不幸な人がある、其人たちから思へば眞實に仕合せだと思ふた所から、あゝほんにやつぱり前の世ての自分〳〵の果報がたがいに報うて居るのだ、と思つて居りました。けれども不足勝ちでした。

或時又求道會で承りますと、それは〳〵如何にも有がたそうにして居られます。不思議でなりません、そこで私は考へました。自分は命がをわつたならば佛に救はれて極樂に行くのだと思つて居るけれど、此の世から護もつて下さつてあるものかしらむと思ひましてからは、皆樣の御話を熱心にきゝたくなりました。私には不思議にも皆樣のやうに理窟も疑も起りません、たゞ皆樣の云はれる事が不思議て〳〵てならないのです。だん〳〵幾度も〳〵も聞くにつけて、あゝほんにそうであつたのかなと、だん〳〵物にあたる度に皆樣の申される如く私の胸にあたるのです。あゝほんにそうで有つたか、此れは全く佛樣の計ひてあつたか、何もかもわしがはからひと思ふはまちがいてあつたと云ふ事に氣がつき出しまして、身に一々の事がしむ樣て有ます。又皆樣の云はれる事がほんにそうだつた、實にそうだつたと感じまして、少しの疑ひも有ませんてした。

或日私は自分の室に入つていろ〳〵自分の此れまでの事を考へ出しました。同じ學校の内に居ても寺に生れた人は外にも多く有るのに、何ぜ私ばかりは始終佛樣の事を感じ、又こないに皆の喜びなさるのを見るのかと思ふた時、あゝ此れが全く佛天の御計ひだと思ふた所から、あれへ此れへと考が及ぼしまして、私はあゝ實に佛樣の御計ひだ〳〵と云ふのはこゝだ、あゝ實に有がたい、私は求道會の御話をきかなんだらどうして此んな所に氣がつくものか、此れが全く佛樣の御手まわしだつた、此求道會は、どうして起つたものかと思ひました所が、其れは全く無漏田さんが來られたらこそ此求道會が開かれた。其御出でなされたのも別に初めから知つて居て關係が有つたと云ふわけでもないのに、偶然來られる樣になつて、かやうな結構な御話をきく事の出來るとは、實に無漏田さんは佛の御使であつた、あゝそうだつた〳〵とうれしくて〳〵遂に私は其所てなき伏しました。其れからは自分が寺に生れた事から、高等女學校へ受驗の日のれくれた爲に入られ無いて、淑女學校に入學したのも御佛の御催して有つたと云ふ事に氣がつき、又淑女學校も高等女學と成つた事やを思ふて。あゝ眞實に佛天のお計ひだと氣をつけさしてもらひ、其れから後は求道會が何と無くうれしく待ち遠しくなりました。無漏田さんの顔を見ると佛樣の樣に思つて堪へませんてした。斯くして私は今日に到る迄自然〳〵に御慈悲の御廣大なことを身に味ははしてもらひます。

今考へて見ますと眞實に私は皆樣の苦悶して居られるのを見、又御話のはからひと云はれるのを聞いて、私はなぜ苦まなかつたのか知らんと思ひます。苦まないはずてす、私はあの少さい時に母から地獄の御話を聞いた時に、佛は最早光明の中にをさめ取つて私を可愛がつて居て下さつたからだなゝと思ひます。其れにつけても又あゝよくもまあいろ〳〵と自分の心に煩惱を起し、羨やましかつた事のあさましさ、實に御耻かしいと思ひます。又此んな者やこそ御佛は御見知つて救ふて下さるか、あゝ此れが佛樣の御慈悲かと思へば、實に私は仕合せ者と思つて何となくたゞうれしくてどうする事も出來ず、御念佛ばかりも勿體ないと思ひますけれど、私はもうどうする事も出來ません、全く佛樣の光明の中につゝまれて居るのですからたゞうれしくて成りません。

くれ〳〵つれに善知識に近づきて佛法の理をよく〳〵問ひ尋るべきものなり、聞けばいよ〳〵德分のあるものなり、故に佛法は先づ聞くを以て肝要とほめ給へり、聞きて疑はず、たもちて失はざるを聞くとは云ふなり、たとひ又佛法の座敷を立ち去らずして聞くと云ふとも、うか〳〵と聞きて信心を起さずば皆徒ら事なり、よく〳〵心を靜めて是を云ふべしたゞ發ずる所信心一つに限れるものなり、されば法然聖人御詠歌に云く

よしあしと思ふ心をさしおきて
彌陀の誓をたのむべきなり

とのたまへり、是等の心を以て能く〳〵心得らるべきものなり。

（念佛明要鈔）

川東村勝光寺の内方が御法義に心がけ、佛照寺と得雄寺とへ自督を調べ貰ひければ、佛照寺は可と贊め、得雄寺は不と貶し、其調の可否あるを内方は深く心配しけるを、庄松これを諭して曰く、佛照寺樣も得雄寺樣も御淨土を持ちてござらぬ、其の持てござらぬ人の言ふ事に迷はずと、御淨土を持ちてござる佛の仰せに順ふより、外に手はない〳〵

庄松香川郡笠居村佐料にて病むを、庄松の眷屬及び同行寺が庄松を駕に乘て、十里ばかりの道を庄松の在所土居村まで送りて、皆々庄松に向て曰く、最早我が内へ戻りたり、安心をして御慈悲を喜べと云へば、庄松の曰く、どこに居ても寐て居る處が極樂の次の間じゃ〳〵

（庄松ありのまゝの記）

教誨

教誨自誡

近角常觀

はしがき

教誨といへば教誨することなれども人を教誨しつゝある間に自らを教誡すること多かるべきなり、蓮如上人は坊主は人をさへ勸化せられ候に我身を勸化せられぬはあさましきことなりと仰せられたり、眞實の信仰の立場よりいへば自己の信仰已外に教誨のあるべき筈なく、眞實の教誨は必ずや自己を教誨することゝなるべし、今其信仰の立場より見たる教誨上の所感を披瀝して、自ら誡となすも是佛陀自然の法則にや叶ふらんと云爾

一、信仰か道德か

教誨を爲すには信仰によるべきか、道德によるべきかといふことがよく論ぜらるゝことであるが、こは簡單なる問題である、一言にして言へば眞實の信仰は必ず道德を具す、道德には必しも眞實の信仰を具せざる也といふべきである。人が眞實の信仰にだに入れば必ず道德は具はるべき筈である、故に信仰を以て教誨すべきは勿論のことである、然らば道德で教誨は出來ぬとかいふに此に大に注意すべき點がある、即ち眞實の信仰に伴ふたる道德ならば、其道德を說くこと夫自身が既に信仰を說きつゝあることゝなる、若し信仰の伴はぬ道德を說くならば如何程道德を說きても其道德は感化を及ぼすことは出來ぬのである、今日よく人の口にする、教誨は信仰によるか、道德によるかと云ふ問題の意議が不明瞭である、若し信仰によらずして道德を說くといふならば其道德は形式の道德である空文の道德である徒らに器械的に古人の金言を反覆し、善行を縷述しても信仰を以て說かねば、一時の興を惹くのみにて之を因人の心に植付けることが出來ぬ、かくの如き道德を如何程說きても何の益もない、若し信仰より出でたる道德を說くならば必しも一言一句に宗教的言語がなくとも道德を說くのが其源の信仰を說くことになる、一歩進みて信仰的言語を用ゐたりといへども信仰其物が生きて居らねば恰かも信仰なき道德と同じく形式空文の信仰となる、此の如きは信仰的の言語を說きたるのみて眞實の信仰を說くとは言はれぬのである、故に教誨が信仰か道德かといふは形式上より言ふべきではない、精神の上より言はねばならぬ。

信仰なしに道德が說き得る如く考ふる誤解と並行したる誤解がある、そは信仰を說くときは道德的制裁を弛緩ならしむる樣に考ふることである、こは甚だしき誤解である、此誤解の來る原因は信仰は佛の大慈を說く其佛の大慈は罪惡のものを捨てたまはぬことを極言せねばならぬ、しかるに佛か罪惡のものを捨てたまはぬといへば如何に罪惡を犯すとも差閊ないと云ふ意義に誤解するからである。其樣な誤解は即ち信仰

なきことを表白してをる。佛が罪惡のものを捨てたまはぬ事實あればこそ罪惡のものが佛を信ぜざるを得ず、一たび佛を信ずれば佛力次第に加はりて自から漸愧心が起りて識らず知らずの間に道德的制裁が緊張せらるゝのである。我が少き經驗によるも因人に著しく改善の動機を與へたるの一例は耳四郎が名號を稱へて其威神力に感激して入信悔悟の人となつた話であつた。古來耳四郎の例の如きは念佛を稱へても猶惡事をなすといふ實例にひかれたものである。寧ろ惡事を爲ながらも念佛を稱へつゝあつたために非常なる佛の御恵みを蒙りて佛力の威大なるに感激して眞實の信仰に入り斷然惡事を止めた事實なのである。故に其事實を說きつゝある間に現に耳四郎の如き因人が亦耳四郎と同じく佛力を感嘆するやうになる。

かく信仰を說くのが即ち生ける道德を說くことになる如く眞實の道德を說くならば忽ち信仰に響かざるを得ぬ、或人か大乘戒を說きて眼前の小皿に醤油の殘りおるを指して、之が殺生戒を破つたのであると言はれた。之を聞きて蓮如上人が紙片の落ちたるを拾ひたまひて佛法頭のものを疎かにすると頂きて懷に入れられた事實を思ひ出して事々物々如來白毫の恩賜たることを氣付かして貰ふて喜んだことがある、こは單に道德を說かれたのではない、即ち信仰を說かれたのである。我々は常に時間を盜み、勞力を盜み、名譽を盜み、多くの人の心を奪ひ、遂に佛法領のものを奪ひ、佛の御力を我が物顏に奪ふものである。佛の眼より御覽なれは因人と我等とは違つたものでない、耳四郎と我等と違つたものでない、そして我等は懺愧心を起さぬのである。かくの如きものがいかで因人に懺悔心を起せることが出來よう、物を持たずして人に物を與へんとする樣なものである。世に因人の道德と尋常人の道德と二つあるべき筈なく、信仰に因人と教誨師の區別はない、されば之を佛より宿れる我等の心中の信仰は自から因人の心中に宿りたまふのである。此佛の御心をありのまゝに披瀝するのが即ち教誨である、信仰も佛力である、道德も佛力である、そして他に對する教誨即ち自己に對する教誨である。

講義

歎異鈔

近角常觀

第二章

執持鈔の第二章は恰も歎異鈔の第二章を反覆説明せられたと同樣であります、筆は覺如上人が取られたれど本願寺聖人の仰に云とあれば如信上人より直々口傳せられたに違ひありませぬ、我々かく親鸞聖人の御言を親り拜聽することを得るのは實に嬉しき尊むべきの極であります、其御言に

是非しらぬ邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり、往生淨土の爲にはたゞ信心をさきとす。そのほかをはかへりみざるなり、往生ほどの一大事凡夫のはからふべきことにあらず、ひとすぢに如來にまかせたてまつるべし、凡夫にかぎらず補處の彌勒菩薩を初として佛智の不思議をはからふべきにあらず、まして凡夫の淺智をや、かへす〳〵如來の御ちかひにまかせたてまつるべきなり、されば われとして淨土へまいるべしとも、又地獄へゆくべしともさだむべからず、故聖人（黑谷源空聖人の御ことなり。）のおほせに源空があらんところへゆかんとおもはるべしとたしかにうけたまはりしうへは、たとひ地獄なりとも、故聖人のわたらせたまふところへまいるべしとおもふなり、このたびもし善知識にあひたてまつらずは、われら凡夫かならず地獄にれつべし、しかるにいま聖人の御化導にあづかりて、彌陀の本願をきゝ、攝取不捨のことはりをむねにれさめ、生死のはなれかたきをはなれ、淨土のむまれがたきを一定と期すること、さらにわたくしのちからにあらず、たとひ彌陀の佛智に歸して念佛するが地獄の業たるをいつはりて、往生淨土の業因ぞと聖人さづけたまふに、すかされまいらせて、われ地獄におつといふとも、さらにくやしむおもひあるべからず、そのゆへは明師にあひたてまつらでやみなましかば、決定惡道へゆくべかりつる身なるがゆへにとなり、しかるに善知識にすかされたてまつりて惡道へゆかはひとりゆくべからず、師とともにおつべし、されば たゞ地獄なりといふとも故聖人のわたらせたまふところへまいらんおもひかためたれば、善惡の生所わたくしのさだむるところにあらずといふなりと、これ自力をすてゝ、他力に歸するすがたなり

いかにも〳〵尊き御告白であります、一言にして云へば佛智不思議を仰ぎて一分一厘も自分のはからひの雜らざる極であります、信ずるより他に別の仔細はなき也であるから地獄であろうが極樂であらうがかまはぬとくそやけにりきむのではない、それでは眞實後悔すべからず候とは言はれぬ、念佛には不思議の力があるから稱へるばかりじやと念佛を力とするのではない、それなれば總じて以て存知せざるなりとは言はれぬ、唯仰ぐべきは佛智不思議の廣大なことである、誓願不

思議の甚深なことである、名號不思議の深廣無涯底なことである、是非しらぬ、邪正もわかぬこの身にて、何事のわかるものか、つく〳〵思ひ回せば親鸞十九歳磯長の御廟に靈告を蒙りてより己來、一日として出離につきて心を安んじたることなく東西にはしりまはりて道を求めしかど少しも安んずることと出來ず、苦み煩ひの極に達し、すでに此世からの地獄にして必ず惡道にゆくべかりしに幸なる哉二十九歳の春明師法然上人に遇ひたてまつりて選擇本願念佛の不可思議を承り、かゝる罪惡深きものをたすけんといへる廣大の御敎化を頂きたる一念に仰のまに〳〵唯不思議と信じたてまつり安心させて頂いた、若し此師を蒙らずば何れの時か生死流轉の苦みを免るべき、若しや若し、法然聖人の仰せに聞違ありて地獄にゆくべき念佛を淨土の業因と仰せられたのであつて、全く聖人に欺かれて地獄におつるともさら〳〵後悔はいたさぬ、もと〳〵無明の闇に迷へる身か不思議なるかな聖人の仰せによりて燈を得、生死流轉の海の中に聖人の敎によりて本願の筏を得た、聖覺法印が聖人の御恩を喜びたまひて誠知无明長夜之大燈炬也、何悲智眼闇、生死大海之大船筏也、豈煩業障重、倩思敎授恩德、實難彌陀悲願者、粉骨可報之、摧身可謝之とある同し御心持たることは和讃によりて明らかである、實に法然聖人が即ち難思の御誓である、無碍の光明である、若し此燈は人を欺く惡魔の燈であり、此船は人を沈むる羅刹の船であるとしても獨りゆくのではない、法然聖人が燈を持つて下さる案内者である、法然聖人が其船の船頭である法然聖人と共に地獄にゆこうが惡道に墮在しようが、如何ようとも聖人の思召通り、如來の御はからひにまかせたてまつるの外はない、義なきを義とす、唯々如來聖人の御はからひに任せたてまつるばかりである。

そのゆへは自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもれちてさふらふはゞこそすかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もれよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし

地獄に落ちても後悔はいたさぬといふことの出來るのはもと〳〵地獄一定の身であるからである、阿闍世王が父王を害したることを悔ゐ、心に悔熱を生じ偏體に瘡を生し心中念言するに我今此身に已に華報を受けたり、地獄の果報將に近つきて遠からずと懊惱愁苦して終には悶絶僻地するに至つた時、月愛三昧にて身を治せられ、佛に見えて栴檀無根の信を頂きたとき喜んで曰ふには、我若し如來世尊に遇はずは無量阿僧祇却大地獄に在りて無量の苦を受くべかりしに、我今佛を見奉るを得たと感泣せられた、そこで佛が汝ばかり助かつたばかりではない、一切惡心の衆生の助かる先達をしたとほめられたら、阿闍世忽ち佛の言の下に一切惡心の衆生が助かるとは何たることぞ、之か爲に我は常に阿鼻地獄に墮して無量劫苦惱を受くるも苦とは致しませぬと申された、これ所謂粉骨可報之摧身可謝之と同意であるが、そも〳〵かくなれるのは佛に遇はなんだらば無量阿僧祇却大地獄に苦しむべき身であつたからである、否々身心惱亂悶絶僻地の身であつたからである、恐多きことながら此涅槃經の文を信卷に引用したまひし親鸞聖人は二十九歳まで道を求むるがために此苦みを實驗

したまひたのである、聖人は十九歳已後ありとあらゆる修行も觀法をも試み一心三觀の定水を凝したまふも六議廉業の浪しきりに動き、三密瀉伽の心月を澄ましたまふも無明煩惱の雲覆ひ、とても〳〵佛になるべくもあらず特に二十八歳の暮頃よりはいよ〳〵臨終の時近づけりと根本中堂山王權現に歩みを運び終に二十九歳の春より六角堂の百日の參籠に祈念をこめたまひたのである、このとき聖人の御胸中、如何におはせしや、想像し奉るだに血の涙である、實にこれ命終近きて地獄の華報遠からず、否々念々刻々生きながら地獄である、其の最後の一刹那に六角堂の靈告、聖覺法印の先導によりて法然上人の撰擇本願念佛の不思議を承はれたのである、其念佛で地獄に落ちてもと〳〵地獄一定の親鸞である、其心中を聖人直々告白したまひて、其故は自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が念佛をまうして地獄に落ち候はばこそすかされたてまつりてといふ後悔も候はめ、いづれの行もおよびがたき身なればとても地獄は必定すみかぞかしと仰せられた、七百歳の下、親しく此告白をきく嗚呼何たる光榮ぞや。

唐朝に傅大士とてゆゝしく大乘をも證り外典にも達して尊き人おはしき其言に曰く、朝な〳〵佛と共に起き、夕な〳〵佛を抱きて伏すと云へり。是は聖道の通法門の眞如の理佛を指して佛と云ふと雖、修得の方より思へば少しも違ふまじきなり。攝取の心光に照護せられ奉らば、行者も亦斯の如し、朝な〳〵報佛の功德をもちながら起き夕な〳〵彌陀の佛智と共に伏す。疎からん佛の功德は機に遠ければ如何はせん、眞如法性の理は近けれども悟なき機には力及ばず。我力も悟もいらぬ他力の願行を久しく身に持ちながら、よしなき自力の執心にほだされて、空しく流轉の故郷に還らんこと返々も悲しかるべきなり。（安心決定鈔）

嘆　詠

人間の活路

左千夫

千年の末に立ち千年の跡を願みよ
歴史千年眼に留るものいくばく
誰れか爭ふ現世泡沫にあらずと

山近ければ山を高しと見る
心小なればおのれを大なりと思ふ
誰か知る人間瞬くひまなきを

學豪や富豪や又權勢の徒や
彼等のたのむ識と財と權勢と
雲烟眼を過ぐる思ひはせずや

風雨は來る時のまにまに
月日はめぐる止む時もなく
遂には萬有悉く消ゆ

あはれ人間人間を知らず
もとより無し神を解するもの

徒らに喜憂する世の騒ぎ

年はふる幾萬幾千年
人は住む幾億萬人の人
誰れか日一日を留むるの力ありし

老病一度身に迫るときに
英雄奴僕を羨み
玉者も乞介に笑はる

現世は闇し底の底まで
人間は悲し生ある極み
死後を解せず生前又空し

只人には信仰の心あり
信心の燈火一度無明を開けば
如來の大慈悲茲にあらはる

如來の力は歳月を斷ち
如來の光は無常を滅す
茲に感ず不滅不窮の歡喜

如來のめくみに人は眞實の力を得
來世を信するに人は始めて闇を出づ
まことや信仰即ち人間の活路

笑ます児

八　風

我が郷里に寺もたす人の、去年の十月玉の男の子を初児に擧げたまへるよし、此の頃初めて聞き知りて、父君に寄す。

幾億の年經て後に生れまさむ佛はたれか待たむと
思はむ
去年の秋は雨繁かりき然はあれど君が館は光りみ
ちけむ
庭に散る銀杏黄葉拾ひ來て其の日と名とを書き置
かしきや
遷りゆく幾代の末はいま間はず兒のあれまし〻今
日をよろこばせ
膝の上にまな兒抱きてあらたしく大き御佛憶はす
か今
朝夕に笑ます兒見ては御佛の御名となへさす待ち
給ふべし

生れたまへる幼き君に。

咲く花のいとしき口にものいはす初めは佛の大御
名をこそ
父君が光に萠えむ若草の野にそゝがしめ君春雨
を

悲泣雨涙

志　都　兒

霜月廿六日、蒙眞氏重病の報知に接し、轟々なす所を知らず、即詠みて贈れりし謌

まがつみの神に襲はれ病みこやる君を訪はんに道隔てたり
いまだ見ぬ君にはあれど人づてに君がつゝみを聞てなげかゆ
鬱科の出湯はよろし冬籠り浴みて器らむ早やいへて來よ
睦岡の埴谷の里の五百枝杉荒るゝしが音に癒へたともらせ

蒙眞子の病氣慰めんとて一夜兩三友と共に歌詠みて送れりしうち

七日出ぬ君が命と聞きし時はせちに悲しく吾は泣けりき
水泡なすもろき命も歌玉の神の子なりと神守らせり
山祇も歌の女神もこゝろ安く君護りまさむ今日この頃は
風荒れて雪降り散らふこの日頃病せる君を吾思ひやまず
山河の隔てもありて相見れど見れどもかなし君が病は
天の幸地のさきはひに癒ゆるなべつとめ吾背子いやます〳〵に
み病のいえにし君と鬱科の温泉に亜びてあひあふは何時
月讀のすめるいて湯にすこやけく分げて來む日の君まつ吾は
贈りたる榿檀は吾兄にかなへりと弟が告げに吾れうれしかり

影向

甲　之

千よろづ物のけじめの中
只一すぢにきわまりて
定まる道をつぎて行く
時のつづまり其の時に
人の迷ひ天地の
さだめ消え、みなぎる
佛の光、時も間も
かぎり滅びとはの命來。

あれあを忘れあが影の
ぬしをいづちとあざるとき
ああ、人の心のひかり。
暗き天地かがやきて
風無き草木ゆらぐとす。
人の思を底ひより
根こじつくせし時の今

心ゆ湧き來よろこびに、
時をわかず所をも
えらばず物のことごとに
そそくなさけを仰ぎつつ、
手をとりかはし人の世に
一人二人とありもせば
死すと恨みじ、身は死すと
盡きせずとはの命のいづみ。

人の迷ひはみ佛の
なさけ消たむと日ねもす
夜すがらこめてみちのべに
木こり草かりささやかの
砦つくりて天地の
めぐりをここにせかむとす。
ああ消え失せよ人のたくみ、
目をとぢしぬばむ自然のすがた。

盡きせぬ命のいづみ湧く。

たくみ無き心うつくし。
自らなる切なる
少き言葉、しがなかに
命ぞこもれ。み佛の
なさけ氣づかずしかれども
なさけのもとに、さながら
花のみさかり咲みひらく
光にとはの命ありなむ。

あれあを知らず、天地も
思はず、ただ目にあらはる
すがたに、もののありのままを
知りてぞ驚く、人の世は
何そもはかなき。ああ消ゆる
影を追はなむ。あひがたき
光ぞ、さめよ、とこしへの
苦しみこころに、救ひこころに。

早の歌

竹の里人

一

天なるや　旱雲湧き
あらがねの　土裂け木枯る
青人草　皷うち〳〵
空ながめ　虹もが立つと
待つ久に　雨こそ降らめ
しかれども　待てるひじりは
世に出てぬかも

二

旱して　木はしをるれ
待つ久に　雨こそ降れ
我が思ふ　おふき聖
世に出て〻　わをし救はず
雨はふれども

《竹の里歌より》

紹介

清澤滿之師著

◎懺悔錄

本書は清澤先生の遺筆を浩々洞同人諸氏の出版せられたるものにして、先生の遺訓の著しきものを蒐集したるものなり、其第一臉扇日乘は先生の手記せられたる日記より拔萃せられたるものにして、師の靈感を集めたるもの也、而して何れも簡潔にして其實驗の味紙上に溢るゝものあり、第二隨筆錄は師が哲學的頭腦より、宗教的問題の上に下されたる解決の圖解なり、師がヘーゲル的三斷論法を常に活用して思索の大綱となしたまひし跡を徵し得べし、第四の有限無限錄は師が多年の實驗を傾けて、しかも師が精密明晰の頭腦を以て按排されたるものにして師が修養實行の跡歷々として徵すべし、其の思想堅實にして頗る秩序的なり、而して此次に來たる思想が即ち精神主義にして師が絕壑を脫して實驗を宣說せられたるものなり而して第三の在床懺悔錄は先生が晩年眞宗の教理に對する信仰を披瀝せられたるものなり、師が思想の順序は初め哲學の理的より進みて無理窟の信仰に入り、修養に於ては自力主義より漸次他力主義に入られし實驗の活師導也、而して在床懺悔錄は師が晩年他力信仰に對して絕大の尊重を捧げて其所信を盡されしものにして師が自ら名くるに懺悔錄を以てせらるゝもの其旨の深きを感ず、之を要するに何れも簡潔なる文字にして之を味ふ人の心次第によりて益々多大の味を感得し得べし、特に條目を數へ擧げて何等の意味をも書加へられざるは愚禿鈔を拜讀するが如く感ずることあり、吾人は先師の教訓を世に傳ふる浩々洞同人諸氏の勞を多謝す。(定價金七拾錢　發行所京橋金尾文淵堂)

◎理想之人

安部磯雄氏著

本書の著者安部磯雄氏は夙に人格の完成に心を碎き、確實なる智識と健全なる常識とを基礎として種々に實驗工夫を重ねらる。聞く氏が昨夏本書の著作に着手せらるゝや先づ日に數時間の運動を取り以て一方精力の充實を計り而して僅々二ケ月の日子を以て業務の余暇に本書を脫稿せられたりと。以て氏が生活の一端を知るに足らんか。無量四百余頁の大冊、一見何となく精力の集中せるを覺ゆ著者の自序に曰く「人は各自ら畜ける所の理想を有して居る、過去に於ける偉人物を理想とする所の人も決して客觀的人物を理想として居るのではなくて、彼の心に映じたる偉人に附和するに種々なる主觀的性格を以てし、始めて之を理想とすることが出來るのである、偉人の傳記は單に言行の大綱を示すに過ぎないので吾人が實際生活を送るに當りては一言一行自ら畜ける所の理想に據るより外は無い。『理想の人』は余自ら畜ける所の理想である、云々』と。而して稿を分つ事五、每編又數章よりなる、第一編倫理——第一章道德の統一、第二章信用、第三章善意、第四章德育の標準、第五章虛僞虛飾、第二編宗教——第一章宗教とは何ぞや第二章宗教の興ふる力、第三章宗教的感情、第四章功名心と宗教　第三編教育——第一章教育の目的、第二章教育制度、第三章讀書、第四章情育と體育、第四章家庭——第一章結婚、第二章子女の教育、第三章家族制度、第四章家庭の經營、第五編社會——第一章公德、第二章市民教育、第三章交際法、斯くの如くして上は宗教倫理より下は交際法談話法に到る迄理想的人門の生活として必須なる凡ての條件は殆んど遺憾なく網羅し盡されたり。吾人は現代の進步せる智識に基き完全なる理想的人格の修養に志ある人士の爲め切に本書を推薦す。但し本書は飽迄も人間常識の見地に立ちて前途に理想を追求せんとするもの、信仰ある讀者の眼には亦必ずや隔靴搔痒の感あらん。之又念の爲め附記し置くものなり。《定價金七拾錢　發行所京橋區金尾文淵堂》

◎宗教詩集 頌榮

一色氏著

信仰を離れたる人生が結局虛假の人生なる時は信仰を離れたる文學が亦畢竟一場の「たゞ言」たるべきは云はずして明らかなり。文辭如何巧みに情趣如何に美はしからんも、其文學の根底にして遂に人生に比らんか、吾人は斷言す、吾人永久の淨樂を窮ふ者に於ては彼の花に戲れ月に樂むの快と等しく唯々吾人の迷情をして彌々愛欲の深淵に沈淪せしむるに過ぎざる事を。吾人は此意義に於て大に宗教文學を主張せんと欲す、否眞の文學は必ず宗教の文學ならざる可らずと信ずる者なり。宜なる哉頃者漸くにして文壇宗教文學の呼聲高き事や。是れ吾人が本書に接して兎にも角にも其宗教詩集の名によつて大に歡迎せんと欲する所以なり。本書收むる處第一編「わが神」より最後「劍を受くるの歌」に至る五十二編、凡て基督教徒の信狀を歌ひたる者、全編に渉りて未熟の譏は免れ難く、猶ほ仔細に點檢せば頗る議す可き者多からん。去りながら我が國詩界の前途猶ほ渾沌たる現時、こは強ち本集の作者にのみ言はる可き事には有らざらん。吾人は本集の作者が獨り能く一世の風潮に順はずして本集を編せられたるの勇氣を多とし、更に猛然として「詩情は如何にして表現すべきや」の問題に苦心研究せられん事を祈る《定價金四拾五錢　發行所　京橋區金尾文淵堂》

時報

年の求道會

慈光の照護により、求道の士漸次四方に起りて、攝取の光益を蒙る人々日毎に加はるは洵に感謝に堪へざるところなり吾人年々歳々過去を顧みる毎に不可思議の佛智を仰ぎ、法運の發揚を讃仰せずんばあらず、翻て自己を省るに廣大の恩德洵に報盡し難きものあり、然れども幸に求道學會の講話第二求道會講話及び第三求道會を開き、一年の間、有縁の人々と共に大慈大悲を讃嘆し奉りしは實にありがたき極みなり、而して月一回の信仰談話會に出席署名したまひし人々を記して共に廣大の恩德を感謝す、

求道學舍信仰談話會

近角常觀　玉木靜雄　長島良三　白神秀夫　岡田菊僊
忠作次　和田良四　田德俊　眞原成覺　飯田義惇
神谷稔　音喜多政治　宇井伯壽　增谷平八　伊藤儀助
階石昇　道塚原秀峰　增田甚治郎　佐伯正　田邊治一郎
三井甲之助　竹內彌納　海野英俊　無瀧田秀孝　池田和市
山本榮順　吉田耕輔　原熊吉　鍛島靜曉　寺山富治
吉原光一　大川美典　西田寛祐　近角きそ　須藤よう
馬場はる　藤田よれ　入鐵美代　藤村みち　大久保玉
吉田ちゑ　小島よしの　齋藤きい　中嶋きよ　服部君代
宍戸悌　白鳥ぎん　高梨はるの　三宅貞子　齋藤たい
益柄やす　氷津富藏　津谷一治郎　福高政澄　中村淨
阿多眺太郎　横山時彦　高山龍善　島中雄三　安田文精
伊藤正雄　上野啓造　木谷韓音　井上專敬　岩尾發龍
渡邊知空　藤井覚　樋口龍綠　安村行雲　松本諫吉
村岡智敎　三上道晉　寺井惠隆　和才誠司　加能作次郎
木山十彰　小羽重定　近角常音　宇野いれ　藤井智鏡
鶴田耿介　佐々木一超　龍山文雄　榮正範　藤原亮快
佐々木耀次郎　辻善定　石川周平　荒川勇男　保科孔治
橘超妙　丸山清作　山路健之助　眞田增九　皆川多三郎
須甲理喜　長沼龜三　佐藤要人　中島きよ　一戸俊策
工藤石太郎　笹森順道　旭覚思　瑞穗克巳　佐々木きくの
本間ふみ　關倉三郎　佐藤兵太郎　組谷新平　黑田顯
佐々木智郎　宮澤直治　澤井信太郎　宮澤善治　宮澤磯衛
八田玄吾　宮澤政治郎　竹內退介　四行德益　石津靜
辻啓太郎　卷田平太郎　藤等忍　桑原旭　長光成
弓寂圓　森山知榮　千葉勉　和田秀健　渡邊安治
渡邊隆藏　渡邊梅　山中惠敬　富岡教雲　山名ゑい
天沼りう　宮澤いち　梅津せつ　四行とみえ　本間久子
本間てふ　深萱英治　深萱りう　梅野潔　海野香淨
平澤又一郎　牧虎三　眞田一智　小池益郎　西本龍山
佐々木磯俊　石川富俊　三宅健次　谷內正順　本澤一爾
佐々木みゆ　鎌田菊枝　上野桂　常光蔡　古川すゑ
古川靜江　西谷まさ　菅瀨忠子　丸茂むれ　前田勘太郎
中尾宇一　田原廓然　八木快蓮　中村淨眞　八十島基
船越三郎　松葉專成　菊池紋平　田中文勝　碓井くに
萩野ふさ　壹郎　田中泰二郎　前川寶治郎　代島みつ
波佐谷みち　刑部たへ　松下要　萩野伸三郎　丸茂猛
宮澤恒治　前田法觀　平野正二　藤村三次　高崎堅二郎
古城美津藏　岡田立影　山本政治　高梨正躬　溪內弋惠
今里孝文　天野熊市　鷹谷俊城　上圓靭負　久保廣次
大谷勝眞　若櫻水滋　中島さよ　桐野梅　小林ふさ
四川藤吉　吉岡清光　玉井幸助　牧田平太郎　北島美雄

德田修一　田中智隆　桃野春興　中村淨眞　三井順次郎
杉崎大愚　塚原しげえ　猪股昌輔　大島牛助　宇野はつ
泉岡小歌　岩井三子　秀きよし　金谷千鶴　小林秀知
江部藏圓　佐久間孝淳　下井香潤　松下稻覺　中村千代吉
渡邊男也　楠基道　森信丸　大原二郎　居本道圓
姑射良平　岡寛明　松本餘吉　加藤茂章　田中みな
小林りき　秀精　片山幽吉　唐崎政成　木間祐正
島田實　山名龍宣　居本道丸　加藤爲吉　吉田彌平
島本直子　清水榮順　遙見磯　田島すに　大久保たま
古澤しゑ　宮崎すゑ　關本俊　中井すゑ　中山みさを
倉田　嬰　池田とよ　馬場はる　中野英　神崎籌子
福岡のぶ子　前島ふみ　前島よき　昆よれ　宮崎はつ
前島りに　曉鳥房　丸山ときえ　手塚すみ　藤田よしの
磯部てい　田中みな　戸田まつ　安田きく　遥美竹惠
芝田たつ

第二求道會信仰談話會

近角常觀　磯部仲子　松永道雄　深水清　吉田和助
青山武男　新井正三　南條秀照　矢部倉藏　黑岩鐵哉
栗田善次郎　木山十彰　深川信六　石井哲次　松永鼎
横尾みな　上野いし　須藤諄次郎　渡邊知空　井上新藏
渡邊秀夫　天堂榮澤　大角二佐二郎　北野庄吉　四田興左衛門
中澤善久　八木快運　宇野順忠　作次　直井藤太郎
松本政勝　河多昶十郎　平澤又一郎　小澤一　堂坂友作
定祐玄定　竹內彌納　長谷川英一郎　天門成章　藤村一
花園雄秀　高橋篤吉　田中孝照　横山孫次　石川潤民
澤口庸三　松平正　細山隆吉　田口忠太郎　松崎傳
酒井宮吉　柴田丈夫　竹中賢惠　大山格作　背柳利
齋藤たい　梅津せつ　泉りか　深田權左衛門　前島良三
古城美津藏　松井百十郎　上野啓造　塚本治郎　武田菊窓
上條縣次郎　久井幸助　長沼たれ　磯部てい　鈴木龍司
原祐次郎　秦俊造　篠原榮三郎　松前要三郎　高木量
金森伊之助　鈴木默童　岡田立顯　松葉專成　眞原成覺
引地高鹿　下田一喜　平野正二　塩內新一郎　石井重殿
葛四兵馬　小池益郎　市川欣一　柘植富久　伊藤直治
宮崎直治　背木正勝　後藤葆眞　中尾宇一　堂樂久七
山內仲吉　渡邊寛治　牧山孫右衛門　牧田しづ　刑部たへ
增澤まつみ　佐合てつ　佐谷初江　池上八三郎　後藤三右衛門
伊藤專　野村武治　川上篤十　萬波靜淵　河野秀顯
田邊信卷　櫻井正一　中村東流　樋口龍綠　近角常音
平澤又一郎　緒方有賢

本年の求道會

佛天の冥祐を仰ぎて本年も益々慈光の普く輝きて多くの人々の心を照したまはんことを祈る所なり、希くは世の道を求めたまふ人々は同しく大慈父の下に集ゐて、無量の供恩を稱讃せむ哉、左に揚くるは例月定期會合時日及會場なり

毎日曜午前九時　求道學舍講話　本郷森川町
毎日曜午後二時　第二求道會講話　九段坂佛敎倶樂部
毎月二日午後六時　第三求道會講話　日本橋蠣殼町說敎場
第一日曜講話後　女子信仰談話會　本郷森川町
第二土曜講話後　第二求道會信仰談話會　九段坂佛敎倶樂部
最終日曜講話後　求道學舍信仰談話會　本郷森川町

求道學舍現況

從來毎朝佛間に集ひて禮拜恭敬の上、歎異鈔及び御一代聞書を拜讀せしが、本年に入りてよりは、正信偈和讃を諷詠して、其後に禮讀文を唱へて歎異鈔を輪次拜讀し、次に御文を

拜聽し、續て御一代聞書を輪次拜讀して茲に禮拜を終ることゝせり、現時總員十五人、一家團欒、常に慈光の間に起臥して、大悲の恩惠に護持養育せらる。

第一高等學校德風會

同會は從來、月に二回求道學舍に於て信仰夜會を開き文類聚鈔を講じつゝありしが既に其半に達し益々熱心に聽講するの人多くして、信仰に傾心する氣風盛なるは洵に喜ぶべきことなり、既に本月二回會合開きたり

高等師範學校佛教會

同會は毎週一回校内に於て開會せられ、亦文類聚鈔を講ず同校亦眞摯に道を求むるの人多くして高潔なる理想に向て憧憬するの傾向なるは慶すべきなり、本月二十四日有朋館に於て茶話會を開き、信交を溫めたり

▲求道學舍講話題

常に念せよ　（十二月二十三日）
歳末の感謝　（十二月三十日）
慈光遐に被らしむ　（一月六日）
攝受正法　（一月十三日）
慚愧心　（一月二十日）
如來の本源　（一月二十七日）　信仰談話會

▲第二求道會講話題

塵勞を洗滌せよ　（十二月二十二日）
新年の法語　（一月五日）

眞實の解　（一月十二日）
他力の眞髓　（一月二十六日）

本誌從來一日發行之處、何分にも一人にて執筆致し候事とて靈感の來らざる時、若くば傳道多忙の爲め常に遲刻致し讀者諸君に對し申譯無之候日夜懸念仕居候次第に御座候就きては今後期日を豫定せず毎月一回發行の事と致し出來得る限り力を込めて執筆致候事と改め申候間何卒御諒察被成下度候

頓首

感想

母を奉じて磯長の廟に詣づるの記

河内國磯長の聖德太子の靈廟は、我母の幼よりして詣でんと志したまへるの所、唯何となく渴仰したまへることいと尊し。我成育の恩を荷ひて久しく學窓に在り、常に父母の心をして閑ならしむるあたはず、以て憾と爲せしが、明治三十年余が業を卒ふるの前年、而も恰も信仰に入りたるの年の十一月、父母相携へて磯長廟下に參詣したまへり。蓋し是れ父母を安んじ奉りたるの初にして、今より顧みれば正に是れ予が信仰生活に入るの初陣たりし時也。當時予は磯長の廟につきて多く知る所あらず、唯聖德太子の靈廟たるを聞くに過ぎざりし也。然れども父母は既に業に無意識に予に大なる暗示を與へたまひ、久遠刼來哀愍攝受を蒙れる大慈大悲の深遠不可思議なるを、我等が爲に感謝したまひし也。首を回らせば爾來正に十年、東西に馳驅して未だ何等の報効したてまつることなし、自ら顧みて忸怩たらずんばあらざる也。而して父君三十七年三月既に彼岸に還歸したまひけり、今や宿緣再び熟して予は母君を奉して磯長廟下に詣づるの好機に遇ひたてまつれり。いでや其靈感を記して後の日の追懷に供へんかな。

明治三十九年十一月二十七日、東京を發して翌二十八日京都に着す、母上は既に故郷より京都に上りて滯在したまひぬ、乃ち母上を奉じて二十八日報恩講滿座に參詣し、親しく宗祖眞影の前に跪きて、面り新法墓の歎德文を拜聽し奉る。下向の後大谷の祖廟に詣て、母上と共に亡兒妙禪尼の骨を納む。嗚呼宗祖聖人を初めとして父君に至るまで遺骸の納まる所、此日此處に母君と共に兒の骨を納む、深厚の因緣洵に思議すべからざるものあり。翌二十九日母上幼時より渴仰したまへる志を再び滿たし奉り、父上が十年前に詣でたまひし遺跡をみ踐、數年已來深く崇拜し奉る聖德皇太子の三骨を一廟の下に千三百年の昔を偲

ばんとて立出す。瀛車七條驛を發して桃山宇治を過ぎ幾多の歴史的感興は絲を繰るが如く髣髴として胸裡に動く。母君指願窓外を望みて曾遊を想起し、蜜柑畑のあるべきを說かる、忽にして丘陵南に面して陽氣蒸ずる處、果して黄果纍々として畫中に入るの想あり。予も亦三十六年の暮天雪るの日故郷爐畔に父君と別れ、孤影隻然として京都に出て南都東大寺と伊勢大廟とに詣で歸東せしの當時を想起せずんばあらず。車中の菓子賣予に語りて曰く此河を過ぎ竹藪終るの處田中首洗池ありと、予凝視すれば何ぞ知らむ是重衡卿首を打たれし處ならむとは。既にして三笠の山は畫くが如く、大小伽藍の起伏せる間、塔影半空に湧き出づるの光景、青丹よし奈良の郡の詩趣、とても〳〵描くべくもあらず。車を下り半日の間奈良朝の昔に遊ぶ。博物館に入れば母上佛菩薩の靈像多きに驚きて合掌して念佛を稱へたまふ。東大寺に詣では本堂修繕の爲め、毘盧舍那佛の蓮上に恭しく昇るを得たり。月恰も三笠の山に出て淺茅が原の暮色いとゞ物淋し、菊水樓に宿れば興福寺の塔影、猿澤池の垂柳電燈の中に冴え渉りて物凄し。

三十日是れいよ〳〵磯長の廟に詣でたてまつるの日也、午前四時母上と共に出立す、時間の違ひにて栢原驛に二時間がほど待つ、待つとはなしに停車場にまどろむ、夢に母を奉して聖なる人に謁へたてまつる。日恰も東に出て、朝曦霧を破りて山々笑へるが如く心地よきこと極りなし。瀛車出て、野外を眺めつゝ貴志驛に着す。寒風蕭颯として柳を吹く、車を雇ひ田畝の間を通じて行く、小丘蜿蜒として走り、寒村三五處々に散布せり、遂に遙に磯長村を望む、丘陵盡くるの處松栢森森として連り、寺塔蒼然として其間に聳ゆ、予は一種森嚴の感に打たれて念佛の聲喉に溢る。其村に入る、茅屋甍堂何んとなく當年を偲ばしむ、神聖の感深くして車に堪えざるものあり。門前車を停め歴階して石磴を昇る。二王門を過ぎ、先づ寺に就きて案内を請ふ刺を通ずれば主僧喜び迎へて緣起を說くこと詳か也。主僧に伴はれて母に隨ひ肅々として廟に參詣したてまつる。

左に金堂あり、金堂の前に塔あり、後に寶庫あり左に經藏あり、又歴階して廟門を通じて入る。正面の丘陵松栢欝欝たるは是和國の敎主聖德皇之御廟也。丘陵の前面柵を繞らし、白砂を布く。母に隨ひ跣足して詣つ。陵前磴に通する處堂を建て扉を鎖す。予母と共に堂前砂上に端坐して虔みて合掌禮拜し奉る。心中念言すらく、嗚呼是れ聖德皇太子が母君間人皇后及び膳妃と共

永久に靈骸を遺したまふ所、眞箇に是れ血肉の三尊に留りたまふ靈蹟也と。寺僧說きて曰く、は廟太子葬じたまふの前二年自ら地を相し、人を督して築きたまふ所也、此扉を通じて行き磴内に入る三間にして又扉あり、通じて一尺にして石を疊みて之れを塞きて磴内に通ぜざらしむ。是維新後宮内省の管理に屬して此の如く一變せり。古老語る所を聞くに磴内深くして奥に至りて益々低し、古木塡蟆其中に滿つ。傳に曰く、三個の臥石棺∴字形に並ぶ是三骨一磴也と。前後扉の間磴壁左側の石に刻するに二十句の偈頌を以てす曰く。

大慈大悲本誓願。愍念衆生如一子。是故方便從西方。誕生片州興正法。我身救世觀世音。定慧契女大勢至。生育我身大悲母。
西方敎主彌陀尊。眞實眞如本一體。一體現三同一身。片域化緣今已盡。還歸西方我淨土。爲度未世諸衆生。父母所生血肉身。
遺留勝地此廟蟆。三骨一蟆三尊位。過去七佛法輪所。大乘相應功德地。一度參詣離惡趣。決定往生極樂界。
嗚呼是れ聖德太子の眞源を闡明したまひし文字。皇太子は是れ和國の敎主日本の釋尊也。肉身を東方帝國に示現したまへりと雖、其源は一實眞如の都城より顯現したまふの所。其一如の境、眞如の都、涅槃の城とは即ち極樂無爲涅槃界にして、法身自然の靈境也。是唯佛與佛の不可思議の佛智海にてまします。此智慧海より無量無邊の光輪を放ちたまひ、大慈大悲の誓願を起したまひて、十刼の昔より常に招喚の御聲を放ちたまふ、是西方の本地阿彌陀佛にて在す。慈悲の觀世音右に待へりたまひ。智慧の大勢至左に徒ひたまふ。和讃に曰彌陀觀音大勢至大願のふねに乘じてゞ生死のうみにうかびつゝ、有情をよばふてのせたまふと。嗚呼如來の大慈大智緣に隨ひ機に應じて我等を攝化したまふことゝ極りなし、しかるに我等凡夫曠刼より己來生死海に沈淪し、六道に流轉して、徒らに人生愁嘆の聲を揚ぐ、大慈大悲の本誓願豈哀愍の涙なからむ、攝受の手を下さざらむ、我等を愍念したまふこと一子の如く、西方より片州に生誕したまひし御身ころ、即ち聖德太子にてまします。新羅の日羅白さく、敬禮救世觀音、傳燈東方粟散王。と百濟の阿佐太子禮して曰く、敬禮救世大慈觀音菩薩、妙敎流通東方日本國、四十九歳傳燈演說と。皇太子一代の聖跡明らかに大慈救世の誓願を實現したまふ、炳として日月よりも明かなり。而して膳王妃は最も太子と同心一體となりて透徹の靈智能く大悲の化儀を翼助したまへり。太子嘗て妃に語りて曰く。汝我意の如く、事に觸れて

違はず、我の汝を得たるは我が幸也、吾死せん日も同穴に埋むべしと。實に皇太子慈悲の聖德は王妃智慧の靈德によりて照耀莊嚴したまふもの、是大勢至菩薩の權化にあらずや。而して皇太子を生育したまひし母君間人の皇后は實に是本地の阿彌陀如來にてまします。而して三尊本是れ眞如一實の境より來生したまふ所、和讃に曰く十方三世の無量慧、同じく一如に乘じてぞ二智即滿道平等、攝化隨緣不思議なる哉。彌陀の本願、觀音の慈悲、勢至の智慧。これ虛想にあらず、空理にあらず。現存せる佛陀の力也。實現せる人生の光也。明らかに人生に跡を垂れて血肉の身を現じて、日本佛敎の基を肇めたまひ、而して親しく三骨を一廟に遺して幾千年の後親しく此靈廟を止めたまふ。げに是れ過去七佛轉法輪の聖蹟たるべく、亦實に日本大乘佛敎の第一義を開きたまひし靈境也。聞說らく弘法大師嘗て此靈廟に詣でたまひ、一夜赫然として光を放ち、明かに靈告を蒙り、第三放光地を發得したまふと。而して我が親鸞聖人が求道心をして切實の極に達せしめたまひしは實に聖人が此靈廟に詣でたまひし時にあらずや。聖人九歲出家の後南北に學び求道の煩悶を嘗め盡して、十九歲の時此無廟に詣でたまひ祈念默禱したまふこと三日三夜、出離解脫の道を求めて專念其極に達し、念々太子に親接したまふの時、忽爾として三滿月金光の光を放ち靈告懇々心耳に感得したまへり其聲に曰く

我三尊化塵沙界。日域大乘相應地。諦聽諦聽我敎令。汝命根應十餘歲。命終速入淸淨土。善信善信眞菩薩。

これ聖人をして厭離穢土欣求淨土の大菩提心を惹起せしめたる警告なり。諦に聽け諦に聽け我敎令す、汝の命根應に十餘歲なるべし、靈告炳として明らかなり。聖人が血涙を揮ふて靈廟を稽首感泣したまひしの跡、現に此聖蹟に非ずや。嗚呼我が履めるの土は當年聖人の跪みたまへるの土にあらずや。我が跪けるの地はこれ聖人の跪きたまへる地にあらずや。年を距つること七百年、世を隔つること幾十代、時に前後ありと雖も今幸に聖人靈告を受けたまひし舊蹟を踐み奉る、當年六句の靈告こそ實に聖人に對する爾後十年慘憺たる求道の一大動力也。往昔釋尊城門を出て、老病死を一瞥したまひしは釋尊成道の曉まで心頭を離れざりし宿題たりしが如く、汝命根應十餘歲の一句は亦聖人が聞法得信の曉に到るまで一刻も忘るべからざりし警告也。遂に十年を經て愈其時の至るを悟り、同じく聖德皇太子の創立したまへる六角堂觀世音に參籠したまへる時、果然靈告は再び響

きぬ。其翌日聖人吉水の禪坊に源空聖人を尋ね參りたまひて、信樂開發の曉に達したまひけり。是れ實に吾人人類の上に彌陀回向の信心を開顯したまひし淵源にして、眞宗開闡の濫觴也。嗚呼當年聖人此廟下に靈告を蒙りたまふにあらずんば、いかでか吾人大悲の攝取に遇ひたてまつるを得む、聖人晩年和讃を作りて曰く

佛智不思議の誓願の、聖德皇のめくみにて、正定聚に歸入して、補處の彌勒のごとくなり。
救世觀音大菩薩、聖德皇と示現して、多々のごとくすてずして、阿摩のごとくにそひたまふ。
無始よりこのかたこの世まで、聖德皇のあはれみに、多々のことくにそひたまひ、阿摩のことくにおはします。
聖德皇のあはれみて、佛智不思議の誓願に、すゝめいれしめたまひてぞ、住正定聚の身となれる。
他力の信をえんひとは、佛恩報せんためにとて、如來二種の回向を、十方にひとしくひろむべし。
言々句々感謝の御心溢るゝばかりなり。つく〳〵皇太子の遺靈を仰ぎ聖人の讃嘆を想ひ奉るに陵上寒風動きて、神聖威力の加はるを感せずんはあらざる也。

聖人の皇太子に宿緣ある當に求道入信のみならず、一代の化儀全く皇太子の芳躅を踐みたまひし也。聖人吉水入室の後二年六角堂に三たび靈告を蒙りたまへり。是より聖人が在俗家庭の化儀を學び玉日姫と共に如來の本願を仰ぎ北國關東の配所に於て一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂の誓約を實現したまへり。東國山岳峨々たるの處、稻田の草庵を結びて有緣の道俗を化導したまひし時、聖人感謝して宣はく。救世菩薩の告命を受けし昔の夢既に今と符合せりと。而して是れ皇太子膳王妃の信仰的家庭を發揮したまひ且つ守屋の邪見を破りて佛敎の眞實を顯はしたまひし眞髓を傳へたまひしにあらずや。聖人又和讃に曰く

大慈救世聖德皇、父のごとくにおはします、大悲救世觀世音、母のことくにおはします。
久遠劫よりこの世まで、あはれみましますしるには、佛智不思議につけしめて、善惡淨穢もなかりけり。
和國の敎主聖德皇、廣大恩德謝しがたし、一心に歸命したてまつり、奉讃不退ならしめよ。
七宮皇子方便し、和國の有情をあはれみて、如來の悲願を弘宣せり、慶喜奉讃せしむべし。

多生曠劫この世まで、あはれみかふれるこの身なり、一心歸命たへずして、奉讃ひまなくこのむへし。

聖德皇のおあはれみに、護持養育たえずして、如來二種の回向に、すゝめいれしめはします。

嗚呼聖人の一代は皇太子の一代也、晩年聖人上記和讃の外に特に聖人の作と傳ふる皇太子聖德奉讃二類あり。如何に聖人か太子に私淑追慕したまひしかを知るべし。其一の奥書に曰く。

南無救世觀音大菩薩、哀愍覆護我。南無皇太子勝鬘比丘、願佛常攝受。

皇太子佛子勝鬘。

是緣起文納二置金堂内監一不レ可二披見一手跡猥

乙卯歳正月八日

拜二見奉讃一人者南無阿彌陀佛可唱々

建長七歳乙卯十一月晦日書之

愚禿親鸞八十三歳

次に文松子傳曰と票し二十句の偈文を書き且つ附記して曰く、

涅盤經言。如來爲二一切一常作二慈父母一、當レ知諸衆生。皆是如來子。世尊大慈悲一爲レ衆修二苦行一。如下人著二鬼魅一狂亂多所爲上。

嗚呼是れ聖人か心血を注ぎて讃嘆したまふもの、哀愍覆護我。願佛常攝受の文字は勝鬘經の文字、涅槃經の文字は阿闍世王得信歎佛の偈文、信卷に之を引用したまへり。而して予が此奥書を拜見したるは實に我父入寂の時其愛讀の眞宗假名聖教の快裏に親から書せられたるを發見せし時にあり、是れ父君の遺言とも謂つべきもの。予拜讀讃仰措かず、遂に此文は和讃奥書たるを知り、又其後此偈は磯長廟中の記たるを聞けり、然れども其偈十六句なりき、今や此廟に詣て、初めて二十句なるを知る而して奥書に脱する所の眞實眞如本一體の一偈四句は、恰かも我寺の太子像の題言にて嘗て知れる所なりき。而して今や廟前

に跪きて最も驚き且つ怪みしは本日は其聖人奥書と同日十一月晦日たることにてありき。暗合默契不可思議の感にうたるゝのみ。嗚呼此地此日聖人親しく滿身の感謝を捧げ奉讃を盡したまふを想到して、唯々沙上に稽首作禮して母君と共に稱名念佛し奉るのみ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

我父君の遺書によりて此廟の意義を示され、母君の宿志に導かれて今正に此廟下にあり。嗚呼親鸞聖人三たび太子の靈告を蒙り激勵せられ、救濟せられ、慰藉せられ、引導せられたまふ。聖人嘆じて父の如く、母の如くと讃嘆感謝し、世尊大慈悲衆の爲に苦行を修したまふこと人の鬼魅に著せられて狂亂所爲多きが如しと宣ふもの、實に聖人一生を顧みて合掌悲咽實に言ふあたはざるものありしならむ。嗚呼我過去を顧みて感泣に堪へざるものあり、我阿闍世王の如く苦悶せり、母は韋提希夫人の如く看護したまへり、而して幸に如來大慈大悲の光益によりて攝取の中に入るを得たりし時、父母携へて此廟下に感謝したまへり、爾來十年の生活、常に攝取の心光に照護せらるゝと雖、吾人煩悶の雲霧常に眞實信心の天を蔽ひて、未だ天下をして佛日を仰がしめざるの罪實に慚愧に堪へざるものあり。されど日光の雲霧に覆はるれども、雲霧の下明らかにして闇なきが如し、吾人無意識の間に佛天の冥祐常に吾人を導きたまひて常に多大の威力を加へたまふ。嗚呼如來の大慈悲、我が爲めに苦行を修したまふこと、人の鬼魅に著せられて狂亂所爲多きが如し。父君逝きたまふの日猶我が爲に慈愛を注ぎたまへり。而して母君我に伴ひて悲惱したまへり。如來は慈父也。悲母也。眞に聖人の反覆したまひしが如く、大慈救世聖德皇父の如くおはします、大悲救世觀世音母の如くおはしますと嘆美し奉らずんばあらざる也。

沙上に禮拜すること多時、起ちて仰ぎて大乘木を望む。傳へ言ふ、太子御母間人皇后を葬りたまふの日柩を荷へるの木を土に埋めたまひしもの也と。母曰く、嘗て父君と共に詣てしの日、樫の實を拾ひて之を植えしに芽を生し、之を生前墓畔に植えかへたまひしことありきと。乃ち亦共に樫の實を拾ふ。主僧亦椎の實を拾ひつゝ丘陵を匝る。結界石を以て陵を圍む、石に三部妙典を刻す。讀みつゝ陵を繞りて正に廟後に至る、丘陵の土上草木雨露に濕へるの間阿彌陀佛の木像直立したまへり。覺えず母子共に合掌し奉る。主僧曰く、是近郷の風習此の如く此處に齋らし來るは其本源に

還歸するの謂也と。予問ふて曰く予之を奉持するを得べきかと。主僧曰く是ぞ洵に貴氏に因緣深き靈像にてまします、恭敬最も然るべしと。母君合掌心私かに感得すらく嗚呼此御姿こそ今日我等を喚び寄せたまひし御佛也と。我亦心中私かに觀ずらく、我身を生育する大悲の母は西方の教主彌陀尊也とは皇太子の太子の靈勅にあらずや。我今母を奉して此廟に詣し忽然として彌陀尊像を感得し奉る。敬虔の情心に溢れ森嚴の氣身に迫る、冀くは終生以て念持し奉る可しと、念佛しつゝ丘陵を匝り畢る。先きの廟前右側に碑あり二十句の偈を刻す。母と共に廟上の小石を拾ひ幾たび合掌禮拜して辭し去らむとするも低徊躊躇去るあたはず。主僧懇に予を伴ひて寶庫に導き遺物及ひ瑪瑙石碑の一片を示す。是れ天喜二年忠禪寶塔を建てんとて大地を堀りたるに出でし所也といふ。爲利益諸有情故、出彼衡山入日域、降伏守屋之邪見、終顯佛法之威德云々の文字を刻す。當年聖人參籠の日を追慕しつゝ語りつゝあるの時、瀛車の時間迫るを以て主客別れを惜み母と共に人車に上り、俯仰回顧靈廟を禮しつゝ停車場に着し、瀛車に入り、破窓の前遙かに森々たる丘陵を拜して謹みて阿彌陀經を拜讀す。母君合掌悲咽して感涙雨の如し。一心專念丘陵を凝視しつゝあるの間、淡靄模糊の裡に隱れ畢りて殘る處は車上遙拜したまふ母上と感得し奉りし彌陀靈像とある耳。乃ち初めて母上と共に相語りて滿腔の感謝を捧げ靈像を崇めつゝ汽車の既に柏原に着するを覺えざりき。

汽車を乘り換へ、法隆寺停車場に下る。平和なる小丘の麓塔影聳ゆるの光景、間はずして法隆寺たるを知る。乃ち寺內勸學院に就きて大僧正佐伯定胤師に遇ふ。師は嘗て京都に共に學びし事あり。師快く自から導きて詳細精密に拜觀せしめらる。嗚呼法隆寺は是皇太子の經營したまひし靈場、金堂、塔、中門何れも當年の建築儼存し、壁畵佛像、寶物皆當年の物を見るべき也。若し歷史的美術的眼光を以てするも法隆寺は我國最古の寶庫也。況んや信仰眼を以て見る、吾人は當時の敬虔森嚴なる信仰を追想して恭敬尊重に堪へざるものあり。而して親鸞聖人亦此寺に參詣したまひて昔を偲び次に磯長に詣でたまへり。吾人は一々の感慨とても此一篇の記する所にあらず。吾人は再び此靈蹟に詣てゝ太子と聖人の遺業を鑽仰し奉らむと欲するの志あり。故に今は磯長廟の所感に關聯して、默すべからざる靈感を傾くるに止めむのみ。

金堂に安置せる中央の釋迦如來及び脇士は聖德皇太子祈願の爲に作る所、藥師如來及び脇士は御父用明天皇祈願の爲に作る所。阿彌陀如來及脇士は御母間人皇后祈願の爲に作る所といふ。阿彌陀如來は鎌倉時代の再造なりと雖、前二者の尊像は當年の靈像にして、莊重にし素實、光顏巍々として威神無極也、何れも後脊の銘は筆勢謹嚴、文字誠實、歷々として當年の信念を徵し得べし。藥師如來後脊の銘は父天皇の崩御の事を叙せり、曰く

池邊大宮ニ治ス天下一天皇、大御身勞賜ヒ時、歲次丙午、召ニ於大王天皇與ニ太子一而誓願賜、我大御病ヲ太平ニ欲ス坐シト故ニ將ニ造レリ寺ヲ、藥師像ヲ作リ仕奉レトスト詔シタマフ。然ルニ當時崩シ賜ヒ造リ不レ堪者、少治田大宮ニ治ス天下ヲ大王天皇、及東宮ノ聖王、大命ヲ受賜ヲ而、歲次丁卯年ニ仕奉ル

釋迦如來後脊の銘は正しく間人皇后の崩御及皇太子及膳妃の薨去を叙せり、文字簡潔なりと雖皇太子が淸淨なる家庭一體堤三同一身の眞相鑽仰し奉るに堪へたり。曰く

法興元卅一年、歲次辛巳、十二月、鬼前大后崩。明年正月二十二日上宮法王枕レ病弗豫、干食王后仍以ニ勞疾一並著ニ於床一。時ニ王后王子等、及與ニ國臣一深懷ニ愁毒一共ニ相發願シ、仰ヲ依ニ三寶一當レ作ニ釋像ノ尺寸ハ王身ナルヲ、蒙リ此願力ヲ、轉シ病ヲ延レ壽、安住セン、世間一。若是定業ニ、以背レ世者ナラハ、往ヲ登リ淨土ニ、早昇ニ妙果一。二月二十一日癸酉、王后即レ世ニ、翌日法王登遐ス、癸未三月中、如レ願ノ釋迦尊像、並挾持、及莊嚴ヲ具ヘ竟ル。乘ニ斯微福一、信道知識、現在安穩、出レ生ヲ入レ死ニ、隨ニ奉シ三主一、紹ニ隆三寶ヲ、遂共ニ彼岸一普ニ遍六道一法界含識、得下脫ニ苦緣一同趣中菩提上。使司馬鞍ノ首止利佛師造。

夢殿の觀世音菩薩の尊像は相好端嚴微笑して寶玉を捧げたまふ。高潔直立したまへる御姿、御衣は左右に靡かして殆むと空中に示現したまへるかを疑ふ。想ひ見る聖德皇太子夢殿に入りたまひて端坐入定したまひし時、縹渺として天地の間に遊び、冲漠として古今の際を樂む。處に東西を沒し、時に上下を泯す。光明無邊にして十方を照し、壽命無量にして三世に通す。生や無生の生にして、滅や無滅の滅也。千三百年前の皇太子は現に拜し奉る靈像にして、千古微笑したまへる御姿は大慈大悲の靈勅を十方の衆生に傳へたまふ。我何等の幸ぞ母を奉じて此靈廟に詣し、此靈像を拜し奉る。接足作禮、南無阿彌陀佛。

夕陽西に沈みて殘光法隆寺の塔を照すの時、佐伯師の厚意を謝し、母と共に京に歸る。武田學士彼感得の彌陀の尊像を相見

て曰く、是れ鎌倉時代の作物也と。且『求道』の爲に夢殿觀世音の靈像を寫さる。表幀掲ぐる所即是也。謹みて氏の厚意を感謝す。明治四十年一月二十二日、聖德皇太子枕病の日。求道學舍靜觀室に於て近角常觀識す。

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に亢奮なる氣風頗る乏しくして、益々信仰の必要を感ず。一般に道義の制裁弛み去りて皆駁格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を攫まむとして胸中幾多の苦悶を抱き。社會實務の人にして志操清淨なるものは其理想を實現せむが爲に、人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼信仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志此の如く切實なるは未だ嘗て見ざる所也

昨年已來。聊か此の時運必要に應ぜむとする微志あり、先輩の企てられし跡を引繼ぎて、一方には求道學舍を設け、此等の道を求むるの人々の寄宿に充て、寢食を同じくして共に實踐躬行に勉め、また一方には日曜講演を開きて眞面目なる人々と共に心を潛めて信仰の問題を講し、互に心靈修養に從ひしが幸に佛陀冥祐と、師友同情とによりて其期する所空しからず、學舍は常に滿員にして幾多の申込に負き、假會場に充てたる居間は爽豁を訴へて求道の人々を容るゝの餘地なし、此に於てや止むなく、懇切なる道友の勸告に從ひ、學舍を擴張し、會館を設立して以て無眉の急に充てむと欲す幸に篤實なる先輩の指導に從ひ忠實なる親友の贊助を仰ぎ、着實なる實行によりて漸次其結果を擧けむこと是實に不肖の至願也。

從來首都に於て佛敎徒に屬する會館の設なく。其不便を感ずる事一日の事に非ず、而して屢々計畫せられて、未だ容易に實行の緒につかざる所以のものは、蓋し其規模大にして完全を期すればなり、故に先づ現時必要に應ずべき適宜の會館を設立して、漸次其大なるものに進むることを欲す。是先づ本會館建設を企圖して佛敎者一般の需要に充て且つ清潔なる社交の中心に供せむと欲する所也。予四遊の際、泰西背年會の組織及會館の設備等を初として、幾多の社會的施設を詳細調査し來りて、此等の事業の我國の佛敎者の手に成らむ事を望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを得は幸之に過るなし。冀くは四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ。協力贊助し玉はらむことを謹て白す。

明治四十年一月

發起者　近角常觀

求道會館設立喜捨金受領報告（第十八回）

一金五圓也　石川縣　風尾なつ子殿
一金參圓也　東京　小森秀知殿
一金貳拾圓也　東海　逸名氏殿
一金壹圓也　東京　遠藤順和殿
一金五圓也　東京　樺島信太郎殿
一金參圓也　北海道　山田友二郎殿

小計三十七圓也

通計貳千貳百八拾七圓參拾八錢也

右御寄附を辱うし難有奉存候
茲に謹んで奉感謝候也

明治四十年劈頭二大出版豫約大募集

文學博士村上專精先生監修　法藏館編纂局編輯

●●●●佛教に關する知識の無盡藏也●●●●

輕便新裝

佛教百科寶典

豫約方法
●定價金壹圓郵税拾錢●豫約期限三月中●豫約價金六十錢郵税拾錢●期限經過後は定價に復す●前金に非ざれば豫約と見做さず●製本五月上旬より着金順により送本●

●●●●百萬の心靈を支配せる信仰大文字は本書に在り●●●●

文學博士南條文雄師監修　眞宗尾張中學學長　住田智見師謹輯

製本
堅四寸四分　巾三寸三分　全文五號活字
振假名付　總クロース背表金文字入堅牢洋綴美裝一千頁內外

新裝美裝

蓮如上人全集

●上製　總布クロース背表金文字入堅牢洋綴寸珍美本　定價八十錢郵税拾錢
●豫約價　六十錢
豫約期限　明治四十年三月三十一日限
●特製　總黑色柔皮卷背表紙文字入三方總金堅牢洋綴寸珍美本函入定價壹圓五十錢
●豫約價壹圓郵税拾錢
●製本明治四十年四月上旬より着金の順序により送本す●前金にあらざれば豫約と見做さず

堅四寸四分　横三寸二分
五號活字
用紙船來上等
振假名附
印刷鮮明
百九頁

豫約申込所　京都東六條市　電話口座貳五五四番　貳五二八番　法藏館

精神界

新年號

新年號(二十四錢)半年分(七十五錢)一年分(一圓三十錢)
發行所　東京巢鴨九七九　浩々洞
賣捌所　東京神田　東京堂　京都　法藏館

本誌要目

◎天地に親しの信樂◎歸依、樹德◎瓜雪處近稿(南條文雄)◎眠れるにあらす◎他律、自律、靈律◎御降下句(大谷繞石)力敏源泉◎涅槃篇(社說)◎讃彌陀偈和讃註(多田鼎)◎身心二の療治(齊藤唯信)◎「獄異鈔」を讀む(曉鳥敏)◎將來の宗教(曉鳥)の◎新年所感(上杉文秀)◎親鸞傳(三六)(佐々木月樵)◎人生は賽の河原なり(坂井習學)◎舊夢を詠りて信仰の威靈を仰く(安藤州一)◎自警帳(金子大榮)◎慈悲始終なし(曉鳥敏)◎仲泊濱の一夜(玉代勢法雲)

附錄目次

エピクテタスの哲學　稻葉昌丸
清澤先生か愛讀せられし書物は『エピクテタス語錄』であつた。精神の背景を知らうと思ふ者は是非共エピクテタス研究し其の多く究せねばならぬ。エピクテタスは實に先生の半面であるからである。英のロング氏深くエピクテタスを研究し其の多くの訓言の内より大原理を發見し。系統的に述べてあるのを、先師の最も親密なりし友人稻葉先生か丁寧に飜譯せられたものてある。

絶待他力教の歷史的證權に就て　佐々木月樵
個人の思想の極點に達した所が絶待他力の信念に行くより外はないといふことは清澤先生の人格の上に證明せられて居る。而して又我々精神主義に安住して居る者は皆その趣きを味ふて居る。この個人の上に味ふて居る信念の發展の順序を佛教々理の發展の上に當てはめて見ると、殆んど個人と同じ徑路を取つて居るのが面白い。かやうにして成つたのが本篇てある。本篇は個人の信念を歷史の上に見たのである。我々は自分の思想や信念を歷史の上に見る時に一種の力を得るのてある。この點に於てはこの篇は是非共道友の一讀再讀を促さねばならぬ。

續追懷錄　多田鼎
一昨年の六月に先師の在世を追懷して追懷錄を出して、多くの先師を慕へる人の光となつたのは道友諸士の記憶にある事であらう。本篇は、其續篇にして、先師在世の折々の物語等を記載したるものて、趣味と實用と兼ねたところの有益な一篇てあります。

處世難　藤岡了空
藤岡師は我等京都の眞宗中學の五年級に在學して居つた時に、舍監として我等を指導して下さつた先生て、おつさあひは僅か七ヶ月てあつたが爾後十餘年の今日まて常に我等を指導してくれらるゝ方てある。先生には清澤先生との問答を記した『養病對話』其他澤山の著書がある。現に播州青山の寺に在つて著書と樂燒と揮毫と念佛とにいそしんて居らるゝのてある、我等は先師清澤先生によりて信仰上の多くの教訓を得たやうに、藤岡師によりて處世上の種々の注意を受けて居る。この一篇は師の實驗の表白てあるからして我等を益する事は多いのてある。道友諸士か本篇によりて處世の術に於て多くのお益を得らるゝ事てあらうと信じます

謹賀新年

文學士　近角常觀先生著
○信仰之餘瀝　價廿五錢　稅二錢
○信仰問題　價五十五錢　稅五十八錢
文學士　清澤滿之先生著
○精神講話　價四十錢　稅四錢
○佛教講話　價四十錢　稅四錢
佐々木月樵先生著
○實驗之宗教　價五十五錢　稅五十錢
○佛教之眞髓　價二十錢　稅四錢
曉鳥敏先生著
○吾人之宗教　價廿五錢　稅四錢
○死之問題　價二十錢　稅四錢
濱口惠璋先生著
○心靈上之修養　價四十錢　稅六錢
○女性と宗教　價三十錢　稅四錢
多田鼎先生著
○修道講話　價廿三錢　稅四錢
和田龍造先生著
○絶對他力論　價廿五錢　稅四錢
文學博士　井上圓了先生著
○佛教通論　價五十錢　稅六錢
文學博士　井上哲次郎先生著
○釋迦牟尼傳　價六十錢　稅十錢
文學博士　松本文三郎先生著
○佛典結集　價六十錢　稅十錢
文學博士　前田慧雲先生著
○眞宗教史　價六十錢　稅八錢
文學博士　武次郎先生著
○王陽明詳傳　價七十五錢　稅十五錢
高島米峯先生著
○一休和尚傳　價四十五錢　稅八錢
海老名彈正先生編著
○耶蘇基督傳　價六十錢　稅十錢
南條、村上、前田博士監修
○親鸞聖人全集　價貳圓　稅十五錢　近刊
○蓮如上人全集　近刊
○女性と武士道　近刊
○佛教倫理概論

發行所　東京市本郷駒込千駄木町二一　文明堂

新佛教

第八卷第壹號（一月一日發行）要目

一部郵稅共十一錢　半年分一圓六拾五錢　一年分二十五錢　切手代用一割增

△第七卷總目次及合本用扉……結城素明
△現今の佛教……加藤弘之
△車窓の感思……白柳秀湖
△唯一主義の二方面……廣井辰太郎
△啄寢日記……石川武章
△覺朝君の教訓……高島米峰
△寓生錄……伊藤政女
△支那の大乘と小乘……橘惠勝
△バン屑……幽月女史
△原語の厭世的……辰己小次郎
△新佛教七年史……境野黃洋
△論語と御一代聞書……拓植秀臣
△大宮孝潤君に與ふ……荻原雲來
△三萬の清國學生……古川流泉
△感應篇と陰隲文……島地大等
△演劇の新氣運……加藤咄堂
△佛教の革新……松本文三郎
△こゞれ松葉……藤井瑞枝子
△實學の工夫……忽滑谷快天
△殘錄……小林舟橋
△佛教の社會主義……林雨水
△池上永壽院……大獅子吼
△讀『小泡十種』……古林溪哉
△悼宮坂大眉君……螺生
倫理と宗教との關係……中島蛤力造

發行所　東京市駒込片町一六　新佛教同志會
發賣所　東京小石川區原町六　鷄聲堂書店
振替貯金　一三五三

警世新報

◎毎號　前田博士　其他諸名士　執筆

新年號　第百八號　要目　一月一日發行

△新年詩話……文學博士　前田慧雲
△回顧錄……文學博士　村上專精
△我等の寶……妻木直良
△趣味と信仰……文學士　芝田徹心
△神の觀念と因果律……島地大等
△一世紀後の教界……理學士　石川成章
△貝原益軒の宗教觀……濱口惠璋
△丁未の干支に就て……島地默雷
△羊物語……藤井櫻村
△邏維國三世相……今長政
△女學生に答ふ……文學士　北村敬嚴
△師教の恩敎……舟橋水哉
△牛乳場入營所感……文學士　海野槐陰
△追想錄……森川智德
△打月俸……井上四香
△夢と信仰……人見仁劍
△羊頭狗肉……石橋臥波
△明けの空……馬尾道人
東條辰己

◎定價一金八錢　◎一ケ年前金一圓八十錢
◎見本は往復ハガキにて申込めは舊號を呈す

發行所　東京本郷區眞砂町三五　大樹園（振替貯金口座第二七八五番）
毎月二回發行

文學博士　村上專精先生講述

人生之要路

人生を信念の基礎樹にて活働的奮鬪的精神を養ひ以て處世の要道と成功の秘訣とを各種の方面に亘りて詳說せられたるは本書なり……吾人この複雜なる世に處して如何にして信念の基礎を得んか如何にして世に處せむか。如何にして活働せむか。如何にして成功すべきや。是れ等の問題は吾人胸中に思ひ止むことなけむ。本書は實にこの航路の指南車にして吾人是れに依りて世に處せむか大磐石の上に立ちて安穩至極に而かも些の危險なく人生を全ふし得べきなり天下幾億の士女諸君速に來りて此の航路により給へ

價　金四錢　郵稅　四錢

清澤滿之先生著　訂正增補四版

修養時感

清澤先生は近來の宗教の泰斗心靈界の明星なり。先生の語る處は宗教の根底なり信仰の奧秘なり切實なる修養の樞機なり。此の著先生が感に觸れ事に處し題を逐ふて記述せられたるもの約八十條を收む縷々信仰問題の奧底を叩て餘蘊なし哲學者も倫理學者も宗教家も教育家も青年も老人も玆に人生問題の解決を得べし靈に飢え道に喘くもの來りてこゝに靈の醍泉を汲め。今や版を重ぬる四平等觀及倫理と宗教との相關の二論文を增補して讀者諸君にまみゆ

定價　金參拾五錢　郵稅　金四錢

眞宗中學舍監故赤松大勵師述

修養小話

本書は佛教聖典中に散在する教訓譬喩譚の最も親切にして巧妙なる訓話を誰にも解し易く述べたる者にして試みに兒童等にこの問題を授けて談話の內に知らずしらず其の品性を發揮せしめんと欲する玉眼也。故に家庭に於ては一日も欠くべからざる好讀み物となり。學校に於ては倫理修身の龜鑑とすべく布教家は以て一の好資料たるを得べきなり。世にお伽草子の類多しと雖も未だ嘗て本書の如く其趣味の富有にして修養に資すべき童話は蓋し稀なるべし請ふ一覽の榮を給へ

定價　金參拾錢　郵稅　金四錢

文學士　近角常觀著述

第三版

懺悔錄

近時求道者が信仰上の金科玉條たる「歎異鈔」の眞髓たる罪惡救濟の意義を闡明せむが爲めに作りたるもの也。而して著者は先づ自己の經驗に筆を起して、半年已上胸中に於て寸時も止むことなかりし煩悶を敍し、最後に佛陀攝取の慈光に接したる事實を詳說す。是懺悔錄の名ある所以にして眞摯一點の修飾を施さゞる所、讀者を導きて共に佛陀の慈懷に眠るの想あらしむ。

寸珍全壹冊　定價金貳拾錢　郵稅金貳錢

發行所　東京市本郷區春木町三丁目二十一番地　森江分店

宗教界唯一の日刊新聞

中外日報

毎號六頁

紙代、郵送費共（一ケ月 三十二錢 半ケ年 一圓九十錢 一ケ年 三圓六十錢）

創業第十一年に入り、既に二千餘號を發行す

教界に於ける當代知名の文士論客は擧げて我紙上に筆を振ひ光彩常に陸離として蘭菊美を競ふの偉觀を呈す。

京都 粟田口三條上 中外日報社

（特電九八九番）

弊堂製品ノ眞價ニ就テハ世已ニ定論アリ今ヤ年改マルト共ニ一層ノ奮勵ヲ以テ平素ノ御高庇ニ酬ントス乞フ左記手續ニヨリ御注文アランコトヲ

謹賀新年 祝各位ノ萬歳

◎宇治茶製造元◎

小包送り の元祖

▲宇治茶直賣廣告▼

茶名及一斤代價表

（玉露ノ部）

宇治ノ魁 三圓五十錢
月ノ栗 二圓七十錢
不知 四圓
露 二圓五十錢
碧 一圓五十錢
鶴 通 一圓
七 碧 一圓五十錢
琉 櫻 一圓五十錢
露 一圓廿錢
松 東 雲 九十錢
竹 九十錢

（煎茶ノ部）

翠 二圓五十錢
雅 一圓五十錢
仙 一圓五十錢
櫻 一圓五十錢
勝 一圓廿錢
戰 紀念 一圓
露 九十錢
玉 葉 撰 七十錢

（折物ノ部）

折 雁 壓 六十錢
上 音 五十錢
玉ノ 末 五十錢
雁 ノ 音 五十錢
ガ 音 四十錢
玉ノ粉 三十錢

（薄茶ノ部）

正 部 ノ 巽 六十錢
喜 正 池 尾 五十五錢
仙 月 ノ 友 五十錢
四十五錢

◎小包郵便直接販賣◎

販賣手續

（一）表中ノ茶名斤數御通知アラバ直ニ送品ス
（二）代金ハ前金又ハ小包郵便代金引替トス
（三）遞信省振替貯金口座ニ加入シアルニヨリ此方法ニテ注文セラルヽ時ハ最便利ニ且安全ナリ
注文用紙ハ御申込次第何枚ニテモ送付ス
（四）代金一圓以上御注文ノ節ハ送費弊堂ニ負擔ス但清韓臺灣ハ小包一個金廿錢ノ增稅ダケ御負擔ヲ乞フ

山城國綴喜郡草内村 七碗堂 古川專太郎

（振替貯金口座一〇〇四番）

近角常觀著（第八版）

信仰之餘瀝

定價拾五錢
郵稅貳錢

近角常觀著（求道秋季號）

人生と信仰

定價貳拾錢
郵稅壹錢

近角常觀校訂

冠頭 歎異鈔

一冊郵稅共七錢（定價五錢郵稅二錢）但三冊までは郵稅貳錢

發行所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

近角常觀著（第三版）

懺悔錄

定價貳拾錢
郵稅貳錢

發行所 東京市本郷區春木町二丁目二十一番地 森江分店
賣捌所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

規定

一、本誌は毎月一回發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

◎廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治四十年一月二十七日印刷
明治四十年一月三十一日發行

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所 求道發行所
東京市神田區神保町
大賣捌所 東京堂

法興六年十月、歳在丙辰、我法王大王與惠聰法師、及葛城臣、道遙夷與村、正觀神井、歎世鈔驗、欲叙意聊作碑文一首。

惟夫日月照於上而不私、神井出於下無不給、萬所以機妙應、百姓所以潛扇。若乃照給無偏私、何異於壽國、隨華臺而開合、沐神井而廖疹、詎升干落花池而化溺、覩望山岳之巖崿、反冀子平之能住椿樹相廢、而穹窿實相、五百之張蓋、臨朝啼鳥而戲吐下、何曉乱音之聒耳、丹花卷葉、映照玉葉、彌葩以垂井、經過其下可優遊、豈悟洪灌霄庭。意與才拙、實慚七步、後定君子、幸無噎笑也。

《聖德太子伊豫湯岡溫泉碑文》

求道第四卷第壹號　明治三十一年十一月廿六日第三種郵便物認可　明治四十年一月廿一日發行（毎月一回發行）